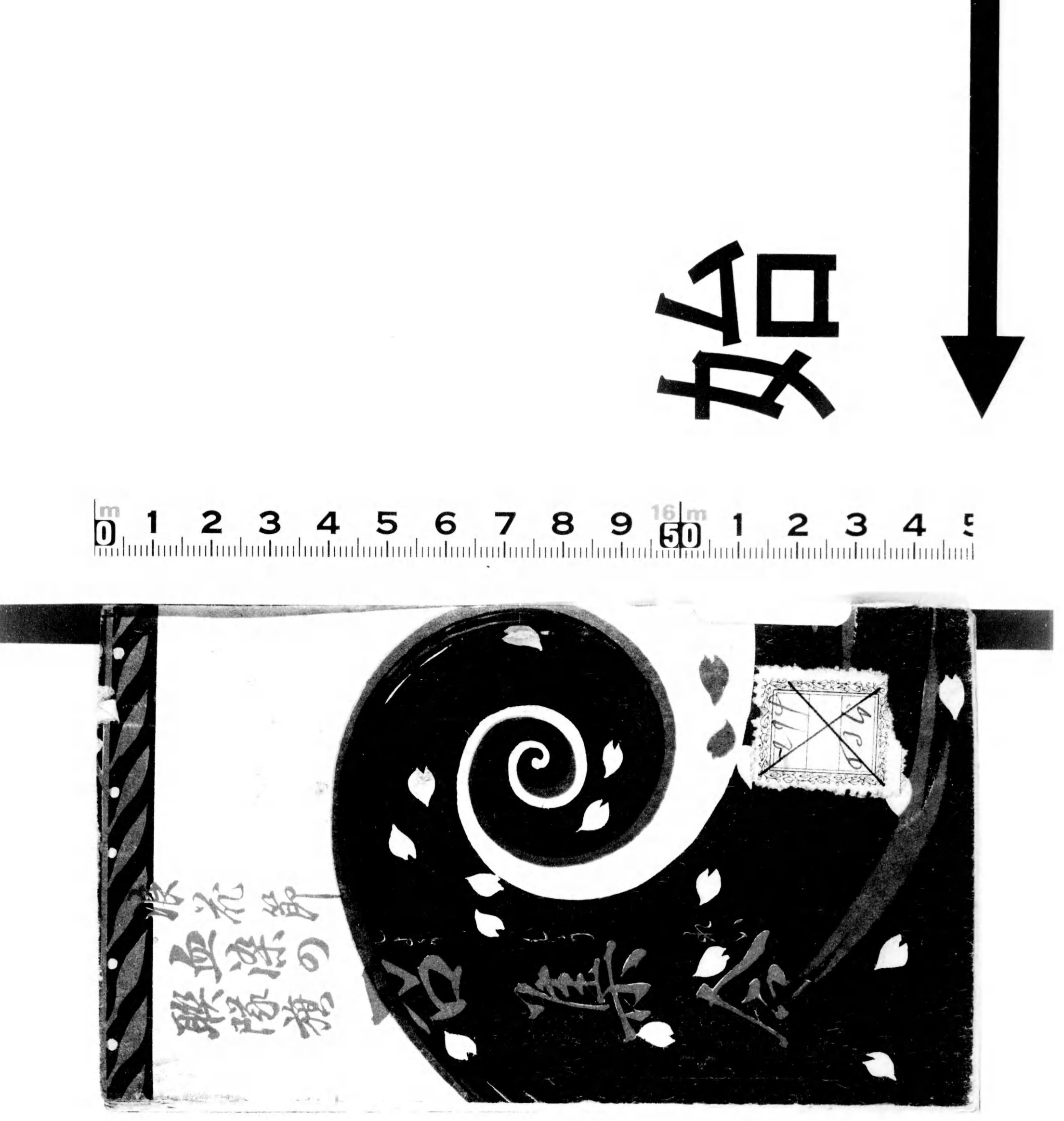

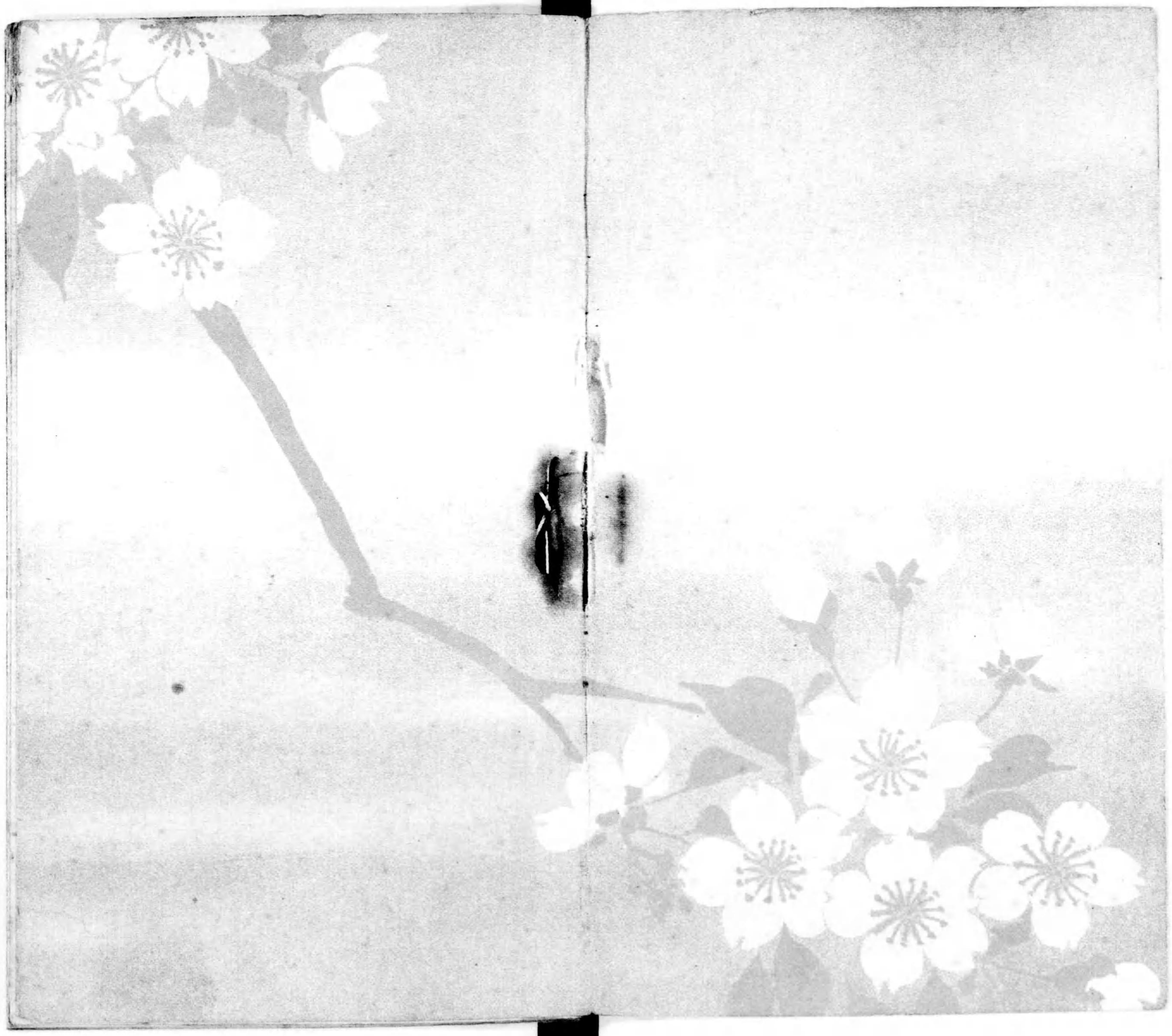

特100
183

浪花節 召集令

浪花節新聞社編

（一）

ふし「花は櫻木人は武士、詠はれまする其ごとく、名譽の軍人山瀨幸太郎の經歷談、その悲壯なる事實をば、芦の浪花の一とふしに、語り傳へん御諸君方……、

詞「さて埼玉縣は埼玉郡、八王寺の町を少し山道に距り

大正
3. 1. 15
内交

ますれば山瀬村と呼び五六十も家があらうかと云ふ小さな村がムいます、こゝに桶の輪換屋にて山瀬幸太郎と云ふ、貧乏な暮しをしてその日〳〵を過して居る人があります、

ふし「たつた一人の母親を、貧苦とは云へ幸太郎さん、不自由させじと幸行盡して居られます、母子二人の茅屋へ月も照るなり悲しげに

詞「さてこの幸太郎と云ふは丁度三十七年時、軍人として國家に盡され、現役を濟せて上等兵の豫備と云ふことに

なつて滿期營外に出づる身となり、毎日のやうに道具箱と竹の割つたのをば天秤棒に先端着けといたして、一里の道を遠しとせず八王寺まで毎日〳〵輪換〳〵と叫びながら幸太郎は精出して稼業に盡されて居ります、

ふし「話かはりて此町に、いと有名な酒造家にて、資産は一寸十五万、衆議院議員と云ふ、名譽の肩書ありまする山岡惣助と呼ぶ人あり、早くより愛としの妻に死分れ、遺されました御令嬢二人あり、姉君を靜江さん、妹君を政江さんと申します、姉は十九で妹は、十七歳の花の蕾

でムいます

詞「さて惣助氏も今は妻が亡いので我娘兩人に家政の萬事をさせます、臺所一切に金錢出納の係りは姉靜江さんが万事計らうことになつてゐる、或日靜江さんが下女のお竹を呼びまして

靜「コレ竹や」

竹「なんでムりまする」

靜「大層手桶のタガが壞んで來ましたから、水が洩つて仕方がありません、今幸ひ表の方に毎ものタガやさん

の聲がするから、呼んで一寸直して貰ひたいがネ……」

竹「畏りました、ア、輪換屋さん〳〵」

輪替「ヘイ〳〵」

竹「アノ面倒ですが、一寸とこの手桶のタガを能く直して下さいよ」

輪替「毎度有りがたうムいます」

と云ひながら山瀨君は、道具箱を山岡の軒端へ卸しまして、コツ〳〵やつては手桶の輪を入替えて居りまする、

ふし「こちらは娘の靜江さん、タガの入替と云ふものは、

一体どう云ふ風にして、輪を篏めるものであらうやと、フト見たい氣が起り、そのまゝ臺所の勝手口より、潜戸を開けまして、山瀬の仕事を熱心に、暫く御覽なされば、

詞「やがてタガが出來上りまして

幸太「へイ、出來上りました」

竹「オヤもう出來たノ、大層早いのネー、アノ輪屋さんお嬢さんがお前さんに茶でも一杯呈げたいと云つていらつしやるから、介意はず内方へお這入りなさいよ」

幸太「イヤ有り難う存じます」

竹「サー遠慮しちやア可けませんと、茲へお掛なさい」

と云ひながら座蒲團を出しました、

ふし「根が軍人の山瀬君、活發にして淡白なれば、別に遠慮も致さずして、云はるがまゝに腰卸し、控へ居ります處へ、

詞「やつて來られたは當家の靜江さん、銘茶宇治を一ぱい仕立てられて、片手に盛りしは伏見で名代の駿河屋の五色羊羹、其れなる幸太郎君の前へ出されて、優しい聲

にて、

靜「サア輪替屋さん、一ぱい召上れ……」

幸太「ヤ、どうもお嬢さん有難うございます」

靜「サア羊羹をお摘み……」

幸太「へ――……」

竹「桶ヤさん、遠慮をせずに、ネ、お上りなさいよ、折角のお嬢さんのお思召ですから」

あまり兩人が勸めますから、幸太郎は懷中より白紙を一枚取出し

幸太「甚だ申兼ねた次第でムいますが、デは之れへ一個だけ頂戴をいたします」

と今白紙に包まうとするので、傍に見て居りました靜江さんが

靜「アレあなたは、甘いものはお嫌ひでムいましたか」

幸太「イヤ〳〵僕は甘いものは大へん好きますが……、實はお恥かしい話ではございますが……」

ふし「何をお隱し申しませう、家に歸ればたつた一人の母があり、今年六十一の老の阪、何時何んどき何う云ふう

ことがありまするやら、加へて家は貧困にて、月洩る窓に雨も漏る、難儀な世帶でムる故、とても充分孝行が出來ませぬ、斯かる甘い羊羹を、母の土產に持歸り、共に食べればどんなに愉快でござりませう、何うぞお許し下されと、聞かれた令嬢靜江さん、感心なされて山瀨に打向ひ

靜「オヤまア然うなのですか、大層親孝行なお心がけですねー、感心仕りました、では一寸と待ちなさい……アノ竹や」

竹「ヘイ」

靜「それでは戸棚に在る五色羊羹五本とも、皆持つて來て此方に呈げてお了ひ」

と云はれましてお竹が立つて桐張紙の箱の中より羊羹五本を持來りまして

竹「マア桶屋さん、甘いことを仕ましたね、妾などは充分にほふこともならない五色羊羹を、五本もお貰ひなさるとは果報者ですね」

靜「竹や、お前は舌喋らんでも可いよ」

竹「へーー」

靜「桶の賃は幾らですノ」

幸太「へイ、一箇が二錢五厘づゝで都合三ッで七錢五厘頂きます」

靜「サウ、ぢやアこれで……お釣は要らぬからネ」

と云つて靜江さん懷中から出したは五十錢銀貨が一枚、

幸太「デモ僅か七錢五厘に五十錢は頂けませぬ」

靜「イヱ介意はぬ程に、早くお歸り、それを持つてネ、又たお母様に何ぞ買つて上げて下さい」

と云はれて幸太郎君は涙ながらに

幸太「デは遠慮なく頂戴いたして歸ります」

靜「又たたび〳〵遊びにでもお來でなさいネ」

幸太「有難うございます、では御免下さい」

靜「アイ左樣なら……」

ふし「やがて羊羹懷中に、母に土產の眞心や、熱き涙に咽ぶらん、心もまこと幸太郎、道具箱をば肩にして、立出でまして喜びつゝ、我家をさして歸りけり、

詞「さて其後と云ふものは、幸太郎用ある度びに、今日

は桶のタガを替えること、明日は盥の輪入れと、毎日毎日山岡の家に呼ばれる、心易くなつて來ますると四方山のお談があるもので、だん〳〵自身の經歷なども談をする、靜江さんは幸太郎が國家の干城にして、豫備上等兵であると云ふことまで聞かれて感心遊ばし、妾も將來の良人と定める人はこんな軍人で、而も親に孝行な仁でありたいと、思ひなされて居られました

「ふし」遠くて近い男女の道、いつしか靜江さん妙な心になりまして、こんなお方を殿御に持てば、屹度愛情が深い

に異ひない、ア、ならうことなら何うぞ幸太郎樣を殿御に持ちたやと、一人小さきその胸を、いためられます哀さよ、

「詞」丁度或る月末のこと、山岡惣助は大層家庭の取締が嚴しくて、たとへ五厘の端た金でも娘には決して自由にさせない、金銀出入帳を手に取られて、自分で具さに御檢閲になると云ふ、極めて堅氣の方でムいます、ズッと目を通される、米屋の拂ひから魚屋の拂ひ、それから炭屋醬油屋とだん〳〵目を走らせて其次に來たのが三圓九

十六錢と云ふ輪替賃……

惣助「コレお竹よ」

竹「ハイ旦那様、お呼びでムいましたか」

惣助「ムヽ、この輪替賃が三圓九十六錢とは、コリヤ莫大に大したものではないか、一体お前達は物を大切に使ぬから斯ることになるのぢや、輪替賃に三圓九十六錢も拂ふ所は何處へ行つても有りはしないぞ、心得ぬと可かぬ」

竹「……旦那様、それは別に妾の罪では……」

惣助「ナニ、お前が知つたことでないと申すのか、お前が輪をよく壞すから輪替賃がこんなに澤山要るのぢや、何か外に譯があると申すのか」

竹「ハ、ハイ、イエ妾が惡いからでございます、以後は心得まするでございます」

ふし「何も罪ないお竹さん、主人の怒りを買ひまして、その場はそれで濟し置き、たゞ此上は輪替屋を、たび〳〵呼ばぬに限ること、小言を喰つて引合はない、

詞 一寸もお竹が輪替屋を呼ばない、呼ばないものです

から静江さんも好きな幸太郎君の顔容に接することが出來ないと云ふ譯で

ふし乙女心の初戀で、静江さんには哀にも、その日〳〵の有様は誠に快々として樂しまず、暮れ行く空を仰いでは小さき胸を痛めける、

詞「やがて静江さん、或日朝早く密かに自分のお部屋を抜出られて、一挺の鉈を持出し、夫れを持つて臺所に飛出し、そこに列べてありまする澤山の桶から盥やら、洗ひ桶やら洗面盥からの輪竹を一々プツリ〳〵と切つて了

つた、すると丁度その時分でした、山岡惣助氏は奥の間で何か急用があり、書類を熱心に御檢べになつて居らるゝ、臺所の方にパチリ〳〵と云ふ音がするので耳を傾けられ、下女めが何か火にでもくべた竹の音ではなからうか、此間も僅かのことから東京市中大火の災に遭ふた、また〳〵万一あんな大事にでもなつたらば一大事と、取るものも取あへず父惣助が臺所へ駈つけて見ると呆れた我娘静江が寢衣のまゝに鉈を振つて一心に行列して居るところの輪ものを皆な切リツブして居る

父「コレ静江ではないか、何故さう亂暴を致すのぢや」
静「お父様でムいまするか、妾には深い望がありまして斯んなに輪を切るのでございます」
父「コレ静江、待て、先日も竹を怒つたが、さやうなことをするから三圓九十六錢と云ふ莫大な輪替賃が要るのだが今聞いて居れば、之には深い望みのあることゝ申したが、こんな不經濟なことをして、輪を切つて了へば何の爲になる」
静「お父様、もう見附つた上は仕方がありませぬ、實は

斯様〳〵で、何うか私の望みをお肯き下さいお願ひですから、」
この頃は新らしい女と云ふことが流行して居ります、古いことは棄てると云ふやつでムいます、自由だとか愛だとか申します、二十世紀は女に油斷がなりませぬ、實は斯う〳〵と聽かれて父上も驚かれた、
父「お父さま、妾は將來の夫として、どうぞ山瀨幸太郎様を貰ふことが出來まするやうにお願ひ申します」
惣「馬鹿を申すな、娘、我家はこれ十五萬圓の財産を有

する、衆議院議員の養子に、輪替屋ごとき者が貰へるか」

靜「お父さま、お言葉でムいまするが夫れは些と聞えませぬ、あなたは兎もすると十五萬圓の、衆議院議員の」と仰やるが、決して金や名譽職のみで人の値が定まるものではムいません、妾は山瀨幸太郎樣ごとき正しい親に孝行な人間を夫に貰ひたうムいます、たつてお肯きなくば、妾は自由結婚と云ふものを致します」

惣「ナニ、自由結婚？　それでは此方へ貰はぬ時は、お

前は山瀨へ嫁に行く積りであるか」

靜「どうしても妾は山瀨樣の許へ……」

惣「ナニ、何うしても行くとナ、お前がさう云ふ心なら十五万圓の山岡家は妹政江に相續させ、お前は廢嫡するから然と思へ、して金錢はおろか帶一筋と雖もやりはせぬ、その儘で出て行け、勘當ちや、音信も出すな出さぬ、親でない、子にあらず、サー出て行け」

ふし「とは云ふものゝ、さすが父子の恩愛は、一つ流れの小川にて、めぐみの水にうるをひし、父はひそかに一と

間に至り、書生田中を呼びまして、一伍一什の物語り、それ故田中氣の毒ちやが、お前は山瀬へ赴いて、斯くと緣談申込み、談合つけて來て呉れと、云はれて田中は畏まり、善は急げで一と走り、

詞「田中が山瀬の家へ參り、斯くと申しまするとと、幸太郎君いと叮嚀に

幸「さうですか、さうお望みなれば女房として貰ひ受けますが、併し妻は下級より向へよ、上級からですとッヒ家の財産が鼻にかゝるものです、爲に一家の不和を

來すは珍らしくない世の事實、されど斯く熱心なる御望みに對して、如何にも山瀬貰ひ受けました、併しながら申上げて置きます、持參金はビタ一文貰ひませぬ又た着物等も何一つ要りませぬからそのお積りで、たゞその代り親に孝を盡して呉れて、飯焚きが出來れば最う結構でムいます」

と云はれて田中も感心した、ア、えらい心掛けだと思つた、で早速歸つて事の由を斯くと山岡主人に申上る、傍で聞いて居ました靜江さん、そんな事くらゐなら、身命

を堪して盡すと思ひ、心で大に喜んで居られまする、

ふし「日もその儘に暮れはて、明くれば例の靜江さん、書生田中に打向ひ、

詞「ネー田中」

田中「ハイ」

靜「お前一寸俥を一臺帳場へ云つて來て下さい、妾は山瀨村へ參りますからと、行つて了はれた、

ふし「氣の早い嫁入法もあつたもの、之が本當のハイカラで、新らしい女の嫁入法と申ませうか、父は此由後にて聞いて、娘は夫では山瀨の宅へ、もう嫁に行つて了つたか、彼れは平素敗けず嫌ひであつた故、一度び斯うと云出せば、後へ引かない性質のやつ、斯くなつたるは全くおれの誤ちなり、さは去りながら、靜江のやつ、ア、嫁きはしたものゝ、後で痛い悲しいで歸つて來るに異ひはない、娘一人を汚したか、ア、困つたな、燒野の雉子夜の鶴、子を思はぬ親はなし、さう斯う致して居るうちに年月は流るゝことの早いもの、昨日と暮れ今日と暮らして明日か川、いつしか三月經ちまして、靜江は何の音沙

汰なし、

詞「聞けばあまり山瀬の家は、富裕でないさうだから、若しや静江が困つて居るが歸れぬのではなからうか、氣になつて〳〵堪らない、そこで惣助君一日書生の田中を招きまして

惣「田中、氣の毒ぢやが、お前行つて一度静江の擧動を見て來て呉れぬか、強いことを云つて嫁に行つたものゝ、定めし泣き悔んで居るだらう、戻りたい氣はあつも、今更歸ることもならず、若しさうであつたらば、

表面から父としては許せないが、裏がある〳〵、田中そこはお前に任すぞ」

田中「イヤ御主人、僕が委細は承知をいたしました」

と云ふなり田中が山瀬方へ行きましたが、やがて三時間程してから立歸つて參りました、

田中「只今歸りました」

惣「ム、御苦勢であつた、して娘は何うして居つたか」

田中『御主人、御安心なさいまし、何うも斯うもありは仕ませぬ、御令嬢が山瀬村へ行かれてからと云ふものは

最う村中に夫婦喧嘩はないと云ふほどで、夫婦模範として敬はれて居られまする、第一今嬢は姑には孝で、夫には貞女、もし他の家に夫婦喧嘩があると、山瀬君なり御令嬢なりが行かれて挨拶をすると、村長が行つて挨拶をするよりも著しいとかにて、實地静江嬢の活動振を見ると、御令嬢は跣足で、裏の井戸端で洗濯をして居られました」

惣「ムヽ、娘がか」

田「ハイ、なか〳〵の働き振りでござります、お仲も至つて睦しく、一ッ茶碗で幸太郎君と静江嬢とが一口づヽ喰べて……」

惣「コリヤ田中、馬鹿を申すな、いくら仲が好くども一ッ茶碗で夫婦が一度に喰ふ奴があるか」

田「ところが全く然うなので、聞いて見ると夫婦の間には茶碗が一ッきりで、二ッあるが一ッは御老母のださうで」

惣「ブーン、兎に角御苦勞であつた、」

と云ふので、これから山岡家はいよ〳〵静江を廢嫡いた

して、妹の政江さんが相續することになる、

ふし弓矢のごとき流るゝ月日、昨日と過ぎ明日とくらして今日は早や、明治の年も三十七、去ぬる三十三年は、諸君もかねて知らるゝ通り、わが隣國の支那國に、清の義和團蜂起して、世界諸國は連合軍を、彼の清國に派遣して、その公使館、領事館、居留民を保護いたし、茲に義和團撃退をいたすと云ふ、音に名高い北清事變、無事とは行かぬが兎にも角にも其年に、鎮定いたした事なれど、此變ありしを機會として、彼の露西亞は東清鐵道守

備と云ふ、美名の下に本性の、瓜牙を磨くことゝなり、其の哥薩克兵及ひ步、工、砲の各種の兵を本國より、滿洲さして派遣する、北清事變終れるに、露西亞は撤兵致しませぬ、却つて要塞を築き、兵營を造ると云ふ、是に於て日本外務大臣、小村壽太郎氏が、露國代表者たる東京駐在公使ローゼン男に打向ひ、滿洲に在る露兵をば、三十六年第三期にて、全部吟爾賓北へと撤兵せよ、嚴しく談判いたせしも、容易に纏らずして、越へて三十七の年、二月の初め、露國の公使はローゼン男と數回の談判

遂に其月五日第二十八回目の會見となり、これがドゞの手切の談判、破裂大破裂、國交茲に斷絶致し、我帝國と露國とが、悲しくも干戈を交へて、無慘の血を見ることゝはなりました、ソレ動員令は下りけり、二月八日朝鮮仁川港内に於て、我瓜生艦隊が、敵艦グロンボイ、ワリヤーク號を擊沈せり、同日東郷平八郎司令長官は、率ゐましたる艦隊を以ち、旅順港外碇泊の、露國東洋艦隊に一大打擊を加へたり、敵艦もろくも旅順港内に逃込みをり、同月十日畏くも天皇陛下には露西亞に對し、宣戰

詔勅喚發せられ、國中は、津々浦々まで、ソレ露西亞と戰爭がオッ初つた、惡ッくき露助イ打殺せと、意氣頗る激したり、召集々々又た召集？

「こんな有樣で、世の中は殺氣立つて居る、さて幸太郎君、いつもの通り……、丁度二月二十四日のこと、朝でありましたが、草鞋ばきにて荷物を肩に對し、仕事に出やうとする處へ、山瀨さん？　召集令狀でございます、と云ふて役場吏員が持來る、彼の赤襷と可令部よりの召集令狀、受取りました山瀨幸太郎、第一聯隊へ入營

の始末、悲壯のお物語りはこれからでございます。

（二）

ふし「諸君も既に御承知の、豫備召集の赤襷は、これ國家の一大事、非常の場合と知られたり、凡そ赤きは危險の標象襷は赤なり非常召集、昔の決闘狀は赤手紙、綿火藥ダイナマイトの運搬は車に赤い旗がある、引張る人夫にも背には赤、汽車進行を止めるも赤、測候所の天氣豫報も赤なれば風雨を報じ、御婦人方も赤いものを見ましると、一と月中の七日間、屹度お工合が惡いと云ふ、赤は兎角に普通ならぬ印とこそは知りるなれ。

詞「餘談はさて措き、山瀨幸太郎君、今し役場よりの赤襷を手に致しまして

幸「靜江」

靜「ハイ、何か御用！」

幸「ム、お前一寸と來て呉れ、アノ私は豫て遠足止は承はつた身であつたが、斯う早く召集令狀か來やうとは思はなかつた、俺は貧乏ぐらしで、最う一ッ本字が解

し難い、お前一度讀んで見てくれ」

山瀬君は云ふが如き貧乏人で、餘り學問をした男でない之に反して妻君は大家に育つて中學程度まで進んだ學者でありますから、靜江さんの方が遙かに文字の讀書きは達者であります、で讀んでみると二十五日午前九時までに聯隊司令部へ出頭せよと云ふ日附の召集令狀

靜「あなた、明日の午前九時に聯隊司令部へ出て來いとの達しでムいますよ」

幸「さうか、明日の午前九時までに行かなくちや成らな

いのか、これは大變だ、斯う早う來るとは思はなかつたが、では今から出かけても行けないから、明朝八王寺の四時十五分の一番で出掛ければ、汽車のことだから間に合ふたらう」

靜「さう遊ばせ」

幸「……お母さん」

母「幸太、何うしたのぢや」

幸「あなたに豫て話して置きしまたが、今度アノ露西亞と戰爭が始まりましたについて、この度お上から私に

も召集令狀と云つて、出て來いと云ふ赤襷が來ました夫れで明朝八王寺發の四時十五分と云ふ一番汽車で、東京へ參らうと存じますが、今日は仕事は一日休まうと存じまする」

母「オ、然うか、幸太、それではいよ〳〵お前も軍に行かなきやならぬか」

幸「ハイ、最う斯うなれば是非戰爭をする爲に彼地に行くに決つて居ます」

母「さうか、ちやア、マア今日は休むが好い、妾も此頃

耳にするが、戰ひが初つたとか、併し前のは支那のことであつたから、勝てたが、今度は露國とか云ふ、國も大きいし、兵隊も澤山ぢやさうな、日本は國も小さいし、兵隊も少ないが大丈夫かえ」

幸「お母さん、御心配は要りません、なる程日本は露國より國も小さい、兵隊も少ないですが、ナニ、日本人には大和魂と云ふ心がありまして、これで以て戰爭をすると、亞米利加であらうが露西亞であらうが、なんでもなく勝てまする、露助イごときは皆殺しです」

母「ム、さうか、夫れで妾も安心をした、怜、それでは出門の祝にお酒でも買はうではないか」

幸「ハイ、夫れも宜うございます、コレ靜江、氣の毒だがお前お酒を二合ほど買うて來て呉れ」

靜「ハイ、アノ……お錢が……」

幸「ナニ、酒二合の錢がないか……」

ふし「毎日〳〵稼いで居るに、たつた二合の酒代がないか貧乏世帯の悲しさは、四百四病の數ある病患の辛さより ア、辛い情けない、幸太郎君男泣きに泣き出した、起て

ば武勇の軍人も、母子三人の生活に、追はれて二合の酒のため、泣かねばならぬ身の上か

詞「と涙を溢して上に上り、支度を解いて押入の中の九十九箱から、豫て藏つて置いた軍服の古びた奴、そいつを自分が着まして、今脱いだやつは、袖だゝみにいたし

幸「靜江、お前氣の毒だが、酒の錢がなければ、裏町の村田さんの宅へ寄つて、これで一ぱい借りて來て貰ひたい、してその中から酒を二合ばかり」

靜「ハイ……」

と云つて靜江さん、

ふし「ビールの空壜片手にいたし、殘る片手に件の仕事着持ちまして、表の方へとお出ましなさる、あはれ昔は十五萬圓の資産家山岡惣助が長女、令嬢と云はれし靜江さん、戀の果てとは云ひながら、貧苦に迫つて、事もあらうに一六銀行へ、取引に行かれまする、代れば變る世の中かな、

詞「戻りには酒を二合買つて歸られる、目指し鰯がお肴です、幸太郎君は軍服のまゝ、炬燵へさして火の種を入れる、炭を入れて團扇で煽ぐと、些つとも火らない

ふし「なんで炭が火になりませうや、火らぬも道理ぢや、私の出征した後で、年老つた母親と、纖弱い女房が如何にして、その日の暮しを立てるやら、一錢の餘裕もない此家、赤貧は洗ふが如くなり、アヽどうして明日から暮すやらと、心配して幸太郎君、落す泪がハラ〳〵、瀧と流れて炭をぞ濕せば、なんで火となり火ららや

詞「アヽ、只今戻りました」

幸「オヽ、御苦勞であつた」

靜「どうなすつた貴方は……大層泪ぐんで居らつしゃる」

幸「イヤ何でもない、今火をおこしかけたら、柴が生で大變に煙が目に這入つて……」

靜「オヤ然う、それぢや妾がおこしませう」

と云はれて、漸やくにして湯を沸かす、母親が其處へ飯臺を出す、母子三人が酒盃を交はす

幸「時に靜江や、お前は埼玉縣切つての金持の御令嬢、私は又た埼玉縣切つての第一等の貧乏人、貧乏世帶の

私の家に、お前ともあらう者が、態々嫁づいて來るとは何の因果か、ぢやが靜江、私が敵地へ行つた後は、一人の母を托するのはお前より外にない、萬事宜しく母の面倒を見てやつて呉れ」

靜「モシあなた、妾も名譽ある豫備役軍人山瀨の妻となつたからには、決して心配は要りませぬ、家は萬事妾が引受けました、又た貴郎にしても、滿洲の地に上陸の節は、敵彈雨と降る中で、お働きなさる際に、國許には母がある、妻がある、故郷で彼女等が何うして暮

してゐるぢやらうなどゝは、決して氣にお掛けなさらないやう願ひます、身はこれ畏くも大元帥陛下に献げし事故、十二分に戰功樹てゝ下さいませ、貴郎が萬々一にも軍法會議に廻さるゝ如きことならば、私はお怨み申します」

ふし「たゞ貴郎が敵彈で、名譽の戰死を遂げられて、茶毘一片の煙となり、その遺骨に、金鵄の勳章送られたら、妾はうれしう思ひまする

幸能く言つて呉れた、夫れで僕も實に安心した、お母さん、今あなたがお聽の通でございますれば、何うか御心配なさらずに……」

母「イヤそれは妾も、もう嫁女の孝行はいつも喜んで居るのぢや」

ふし「それでも天道樣は聞えませぬ、と云ふのは他でない靜江も後月は臨月であるのに、それに未だに子が生れぬお前も軍の門出に一目、靜江の腹から生れた子が見たからう、子の顔知らずに出征とは、何と殘念なことではないか、

幸「イヤ母上、御言葉でございまするが、親子の情と云ふものは、見れば分るゝが尙ほ辛いものでございます卑怯な心が起つてもなりませねば、子供の顏を見ぬで行くのも宜しいかと存じます」

母「それも然うぢやが……コレ靜江、お前は大さう顏をしかめて來たが、食物でも中毒たのではないか」

靜「ハイ、お母さん、最前から横腹へさして棒を差込むやうに氣が變になつて來ました、非常にお腹が痛みます」

母「エッ……ソレぢやア何かの中毒つたのではないか」

靜「エー、さき程お使ひの戻りがけ、便所で水のやうなものが下りました」

母「エッ、では幸太、靜江はお產をするのぢや、サ、釜の下をよく焚き付けて、湯をタップリ沸かしておいてお呉れ、サア嫁女こちらへお來で……」

と云ふので母と嫁は取敢へず少し離れた處へ行つて介抱をして居る、幸太郎はランプの燈火を點ける、山瀨の家は上を下への大混雜……と云ふのも何だか……さて

左様斯うしてゐるうちに早や聞えるは錦糸紡績の午前三時を告ぐる職工休息の隼の音、

母「ア、怜や、何う云ふ譯がまだ出來ない」

幸「只今鳴り居りまするは、丁度紡績の朝の三時、今から私は行かねば午前四時十五分發の汽車にて東京へ行くことは出來ませぬ、夫れでは母御、萬事はお賴み申します」

母「それでは幸太……いよ〳〵お前は出立するのか」

幸「ハイ參ります、」

ふし「ア、悲絶又た壯絶、貧苦の上にと愛しの妻が、愛子を生むに難産で、死別生別計られず、三時の笛に起ち出ねば、東京行は間に合はぬ、如何に國民の義務とは云へ斯る悲慘を後にして、立行く幸太の心の裡、思ひやるだに涙なり、

詞「山瀨君遲れてはならぬと、一目散に八王寺ステーションに突貫する、見送るものもない、どうも山瀨村の村長以下收入役、書記など云ふ奴は威張るばかりで、不都合なもので、同情などは少しもムいません、何とか公職

に在る人等が之を見てやらねばならぬものと思ひます、

寒風吹く二月の空、七重八重に着重ねても尙ほ寒さを覺ゆる其頃、空には星が光々として居る、やがて幸太郎君ステーションに到着したのは四時十分、もう五分で汽車は滊笛もろ共此處を發やうと云ふ間際、驛夫がベルを急がしさうに盛んに鳴らしてゐる、

ふし「着きはついたが山瀨君、一輪替屋の貧乏人、加へて家には產氣の妻、汽車賃とてあらう筈なし、半額證は軍隊よりのものあれど、其半額の金がない、愚圖々々して

は汽車に遲れる、之は驛長に訴へて、無賃乘車に若くはないと、

詞「驛長に掛合ふ、新宿驛にて下車するものだが、無賃乘車を許して貰ひたい、と云ふと驛長も同情しまして、こゝに全く無賃で乘車することになり、もう五分も經ちまして、ピユー……と鳴つた滊笛一聲、汽車はドス黑い煙を後に、サア進行し出した、文明の利器は有り難いもので、やがて山の手線なる新宿驛に着した、いよ〳〵幸太郎君第一聯隊卽日入營の條は一と息しまして……。

（三）

詞「新宿に着きましてより、各種の團体が歡迎しまして
いとも叮重なる接待をいたしまする、山瀬幸太郎君は豫
備歩兵第一聯隊第一大隊の第一中隊第三分隊へ編入され
ると云ふことになりました、さて話は少々岐れますが、
一週間ほど經つてから

甲「親分や」

親分「何だい」

甲「例の話は甘く參りましたか」

親分「イヤ駄目だよ」

甲「殘念だナ、一体どう云ふのです」

親分「さればだ、日清戰役には、人夫共が餘りどうも亂暴
をして、清兵の戰死した奴の懷中ものを取っては手當
り次第掠めたものだから、歐米人の新聞紙で日本人の
無情なことを云った、心ある者も實に憤慨して居るさ
うだ、で今度は人夫を一人も採用しねいンださうで、
だから此度は駄目だ」

甲「イヤそんなことでムいやすか、そんな事と知れて居りやア、嬶アを返すのぢやなかつたに……」

親分「氣の早い奴だ、もう先きへ嬶ア返したのか、人夫に行けるかどうか分らぬい先きにボツ返す奴があるかい……時にお前等に相談がある、一人前五十錢づゝ寄附してくンねい」

甲「親分、それを何うするのですか」

親分「外ぢやないが、去る日八王寺のステーションで、俺等の乘つた客車に居られた、彼の山瀬幸太郎君、彼方

のことに就てぢや」

乾兒「親方、シテどうするッテンです」

親分「さればぢや、外の軍人達は大てい武士の魂ッて處で軍刀を持つて居たが、お氣の毒にアノ幸太郎君は何一つない、不自由なお暮しで氣の毒な事だ、就てはだ、お前達五十人居れば五十錢づゝで二十五圓は集る、俺が二十五圓で五十圓にして、軍刀を一口、切れ味の良さうなやつを買つて上れば宜いと思ふが」

と云ふので何れの乾兒も皆な大賛成、立どころに五十錢

づゝ二十五圓集つた、そこへ二十五圓足して親分が、都合五十圓に纏めて軍刀を買ふことに相成つた、此人は土木請負業を渡世とする、池口の金五郎と云ふ仁でムいまする大へん俠氣のある方でムいまする、

詞「さて或日、この池口金五郎さんは一同の者を引率なして、山瀨幸太郎に面會を致さんと、聯隊の門の處まで出てまゐりまして、

親分「オイ藤太」

藤太「ハイ、親分」

親分「アノ門衛の兵隊さんの處へ行つて、山瀨幸太郎君に面會を許して呉れるやう叮嚀に賴んで來るのぢや」

藤太「ハイ、承知しました」

と云はれて、井口の藤太と云ふ乾兒、門の哨兵に打向ひ

藤太「ヘイ一寸お願ひ申します、私は八王寺町の池口金五郎と云ふ土木請負の仲間でムいまして、一寸、山瀨幸太郎君に御面會を願ひます」

哨兵「オ、面會か、山瀨とは何中隊か」

藤太「親分、何中隊ですか」

親分「イヤそいつア分らねい」

藤太「エヽ中隊は分り兼ねますが……豫備役で」

哨兵「フーム、それでは此の内らに兵站部があるから、あそこへ行つて聞け」

藤太「へイ有り難うムいます」

哨兵「コラ何人で行くのか」

藤太「へイ皆で五十一名で……」

哨兵「皆な面會か」

藤太「へイ左様……で」

哨兵「ムヽ、宜し行け、」

と云はれて中でやう〳〵帳簿を繰つて貰つて、教へて貰つて山瀬君に面會、

ふし「やう〳〵會うて見ますれば、八王寺の停車場で、顔見合せた其時の山瀬幸太郎君、その古びた服、破れた穿物、顔色青凄め、髪は伸びて居たアノ時と丸で違つて、今は新調の洋服に、新らしい帽を被り、腰には劍を佩びて居る、威氣揚々として、さすがは國家の干城なり、今し出て來た山瀬君、數多の人等を打眺め、

幸太「僕が山瀬幸太郎ですが、貴方達はどなたですか」

金五「私は八王寺で土木請負業を致して居る池口金五郎と申す者でムいます、實は貴方が御入營の際、同じ客車に乘りまして、日頃あなたの御孝心と云ひ、あの時のお有様と申せ、心の裡を察しまして誠に涙に咽んで居つた者でございます、此たび私共は、一同人夫志願を致しましたが、お許しがございませぬので、責めては日本刀一口をあなたに差上げ、八王寺村より出身の軍人に、一人ども露助を多く斬つて貰へば、聊か我等も

國家へ對する御恩返しの一端と存じ、斯くは乾兒を打連れまして、罷り越しましたやうな次第で……」

幸太「ハイ、あなたが夫れでは池口金五郎と仰やる方でしたか、これが他のことなればお斷り申しまするが、刀を下さるお芳志故、有りがたく頂戴して置きます、して彼地に上陸したる曉、イザ斬合となりますれば、諸君等の思召を忘れませぬやう私は此の日本刀を引抜いて、當るを幸ひ力の續く限り、死物狂ひで斬倒しませう、してモシ私が露助の敵彈に命中つて、美事戰死を

遂げた時は、池口殿、その時こそ貴方への御恩報じと思つて下さい」

金五「イヤそれは萬々忝ないお心、たゞ八王寺ステーションで一と目見たのが始めての御面會、してあなたは八王寺のどの邊でございますか」

幸太「私は八王寺町に一里ほど離れた處、山瀬村のものでございます」

金五「オ、然うでございますか、夫れでは何日御出發でございますか」

幸太「ハイ、その期日は中々我々には伺ひ知り得ませんが何でも中隊長殿のお言葉に依りますれば、こゝ旬日の中とのこと故……さやう、もう七日間も經つたらば遠く彼地に渡ることゝなりませう、その命令は何日かは事秘密に屬してゐますから確たる處は分りませぬ」

金五「左樣でありますか、いづれ貴方が御立ちなさる砌は金五郎も新橋までお見送り申す積りでございますが、それでは是れで失禮を致します」

幸太「さうですか、ぢやア失敬を……」

ふし分れを告げて金五郎、山瀬は共に右左、動員令は今日か明日かと皆々は、心も心ならずして、待てばいよいよ三月三日、午前一時は三十分、各員に命ありて、動員せよの仰せなり、こゝに於て、各兵士、軍帽を頂いて、星章も鮮かに、背には背嚢、防寒用具を整へまして、戰時服嚴めしく、何となく又た悲壯にして、整列いたす勇しさ、

詞千代田城裡、大元帥陛下に最敬禮を申上げる、一個聯隊意風堂々として、日頃調練したる練兵場を後にして

新橋さして出立の光景、市民は此時眞夜中にも拘はらず戸表を明けていと靜肅に人々を見送る、熱誠なことは血が湧きまする、萬歲聲裡に出立する、三更霜を履んで幾千萬の兵士が國の爲めに出立するのである、今し組み銃をして、一隊が進行を中止し、休息する、家族の者は屬いて來て居る、親戚も見送つて居る、此時の心の有樣と云ふものは皆な〳〵殺氣立つて、又一種異樣な感じに充されて居るものでありまする、さて中にも豫備一聯隊の第一中隊の中隊長林大尉が向ふを御覽になると云ふと、天

竹木綿にて長五丈もある大旗、夫れに太文字で以て『山瀬幸太郎君の出征を祝す、池口金五郎外若仲』とある、此の鮮かに書記したるものを見られた林大尉殿が

林「オイ佐藤少尉」

佐藤「ハイ中隊長殿、何の御用で……」

林「アノ大きな旗を見いよ、中々見事なものぢやな」

佐藤「ハイなか〳〵立派なものでございます」

林「一聯隊一中隊に山瀬幸太郎と云ふ者があるか」

佐藤「ハイ有ります」

林「中々交際家と見える、一度これへ呼んで見給へ」

佐藤「ハイ……山瀬幸太郎！」

山瀬「ハッ……」

佐藤「中隊長殿がお呼びぢや」

と云はれて山瀬上等兵、ツカ〳〵とそれへ出て挨拶をする、

林「山瀬と云ふは其方か」

幸太「ハイ私です」

林「アノ旗は大層見事ぢやが、お前は餘程交際家と見え

る、お前の家は名望家か」

幸太「ハイ、私は一輪替屋に過ぎませぬ、實は斯様〳〵」

と話をすると林中隊長も感心した、又た同情もした、さてそれでは向ふに來て居るのが池口金五郎と知れ、林大尉の許可を得まして、面會に赴く

幸太「池口さん、先日は誠に有り難うございました、私は其後神樂坂上りました中村刀劍店にて、關の孫六と申すのを一口求めました、代が五十二圓とか申しましたが、事情を話し、五十圓よりないと云ふたらば、向ふ

も夫れではと、氣れいに負けて五十圓、此通り……」

金五「ア、成程、夫れは結構でした、私はまだ關の孫六と云ふは名ばかり聞いたが、見たことがない、どれ見せて頂きませう、」

と見れば、秋水、夏尙ほ寒い切れ味の仕さうな奴です、

金五「コラ使ふのも宜しい、これて山瀨さん、ロスケの奴を菜切りサイ切りやつて下さい」

と頻りに萬歲々々を唱へられつゝ、新橋ステーションへと參りますれば、今や發車豫定の午前一時三十分、滊笛

を合圖として、瀘車は新橋を離れて西へ西へと黑煙を殘して出立、先づ廣島驛に着、こゝに一時滯留、

ふし「やがて四月の二十二日、三日の両日を、御用船香港丸、臺南丸、山城安藝や常陸丸、其他に分乘いたして、いよ〳〵廣島より渡清となりました、警護の軍艦何々ぞ矢猛心の大島艦、心の程も赤城艦、司令長官細谷海軍少將を始めとし、面會の方々なり、國民熱誠の萬歳喚呼の聲に送られて、今や出で立つ字品港、五月五日となりければ、コート灣燈臺港臺山へと第二軍が上陸あり、今や

戰ひは十六合に渡り合ひ、追擊して進み進んで占領地をば擴張し、いよ〳〵金州南山の、大激戰に幸太郎、山瀨君が武功の勇壯談は、血染の聯隊旗、血あり涙の物語り次回にて講誦仕る。

（四）

ふし「話轉じて山瀨の家族、幸太郎が出征してからは、ます〳〵落込む貧苦の穴藏、妻の靜江は赤子を連れて、老母と共に働くが、母は糸引き靜江は縫物、いたせば女の

手並ゆゑ、知れたことより金が出來ぬ、子供に飲ますミルク代、苦心致せど覺束ない、

詞「然し斯ういたして居る中に、母さんは貧苦やら何やらにて重き病の床に就かれた、ア、困つたことゝ靜江さんが一人で心配、あまり心配するので最う此頃では靜江さんも痞せコケて、髪は赤くなつて雀の巣のやう、なれども三人の口糊せん爲め、一生懸命に立働いて居られまする、が何うもミルクが買へない、又た母の藥代も出來ない、之ではならぬと焦心るが矢張り成ないものはなら

ない、そこで靜江さんは、もう斯うなれば仕方がない、誠に厚ケましいが父上に泣付いて、子供のミルク代と母のお藥代を何とか都合を着けて貰はうと思ひまする、なれども晝は八王寺町を通るは顔を刺す心がするので、或夜一里を隔つた八王寺へと行きまする、脊中に子供を負うて、足の運びもトボ〳〵と、

ふし「やつて來たのは父山岡の門前なり、勝手覺えし家の中、なんぼ山岡娘でも、昔に代る今の樣、汚ない着物は入りにくい、玄關より入らずに、裏手の門を叩きまする

靜「モシ御面下され〳〵……トン〳〵……」

○「誰方様でございますか、今自分裏門をお叩きなさるは……」

と云うて現はれまするは下女のお松

靜「ハイ妾は當家の娘、靜江でございます」

○「オ、あなた様は靜江嬢様でございますか、ようこそお出で遊しました、一寸お待ち遊ばせ、旦那様に申上げて參りますから」

靜「ハイ、どうぞお賴み申します」

ふし「世は世であらば何のその、お松お竹の女中にまで、言葉を低くお賴みせねばならぬとは、ア、何たる困果ぞや、イヤ〳〵これも元々は、自から出た錆仕かたない、

詞「お松が主人惣助の前へ出まして両手を支へ」

お松「旦那様申上げます」

惣助「何ぢや」

お松「只今アノ……お嬢様がお見えになりまして、お父さまにお會ひ申したいやうに仰せられて居られまする

惣助「ナニ、嬢……ハ、、、、馬鹿を申せ、嬢は彼處に

寢て居るではないか」

お松「イエ〳〵政枝様とは違ひまする、ソレ昨年山瀬村の輪替屋と自由結婚とやらを遊しました、アノ靜江嬢が赤ン坊を負ンぶされまして、裏門に見えて居られます る」

惣助「ナニ、靜江か來たか、赤ン坊を脊負つて、娘も何うして居るか、見たかつた、早くこちらへ通せ……」

と云ふのが親心、云ふかと思ふと斯うは云はない、惣助さんは不慈悲にも

惣助「アレは元々、好いて山瀬の輪替屋へ嫁つたのぢや、困つて居やうが何うも出來ぬ、又た親でも頼つて來をつたのぢやらう、可けない、碌なことぢやない、早く歸せ〳〵、追歸せッ」

と鼻息が荒いのでお松も面喰つた、此儘歸すもあまり取次甲斐がない、と云うて主人の吩付に反抗は素より出來ぬ、ハテ困つたと相考へた末が思ひ付いた一策、これはアノ書生の田中に振るのが何よりの方便、と早速田中の處へ駈付けて斯く〳〵と話を持かける、すると田中は親

切な男ゆゑ、それは氣の毒と云ふので、一應靜江にも會ひました上、主人惣助に談判に及ぶ

田中「御主人、折角靜江樣が來て居られるに、會はぬで歸すとはあまりの無慈悲なやり方、世間の手前もござりますれば、兎に角一と目だけはお會ひ遊すやうに願ひます」

惣助「イヤ田中、それは可かぬ、當家を見限つて出て居た女を如何にしても父だ娘だと云つて面會は出來ぬ、早く追ひ歸して了へ」

田中「ソレは可けません、斯かる夜中に來られたに就ては何か仔細があるに違ひはないこと、兎に角」と云ふので、田中の斡旋で無理に靜江を父に會せる、

靜江「お父さま、長々の御無沙汰、不孝の段はお容し下さいませ」

父「許すも許さぬもないワ、貴樣は娘でない、おれは父でない、早く歸れッ」

と劍もホロ、の挨拶に靜江は取つく島もなく、田中の仲裁でやう〳〵口を開き、

静江「父上のお怒りも御有理ながら、妾も其後良人山瀬は月露役に出征いたし、今は金州南山の方面に、銃砲の音を聞きつゝ國の爲めに軍戰をいたして居りまする、就ては後に殘りましたる母と妾と此子三人、其日〳〵を稼では居りますものゝ、女の腕にて知れたこと」

ふし「ミルクの代も出來ませず、搗てゝ加へて此頃は、母が重き病の床に就きまして、そのお藥も買へぬ始末、お氣毒にはムいますが、どうぞ父上お袖にすがり、夫人が戰死をしまするか、凱旋なさるか夫までは、ミルクとお

藥買ふお錢、お貸し申して下されまするやう、娘が一生かけてのお願でございまする、何うぞ父上お賴みと、手を合さぬばかりに泣付けど、性來冷酷な山岡惣助、娘の願望肯かばこそ、馬耳東風の聞流し……

惣助「いづれお前妻になれば姑もあれば子も出來る、苦勞もあれば糸爪もあるサ、そんな事を一々父ン處へ言うて來る野暮があるかい、下らぬことを云はぬで早くお歸り」

静江 お父さま、でもムりませうが一生かけてのお賴み、

どうぞお肯入れ下さるやう……」

惣助「馬鹿ッ、早く歸れッ、一生でも二生でも山岡にそんな金はないワ、父だと思はず早く歸れッ」

と言はれた靜江、

ふし「もう云ふべき言葉も出ず、それでは仕方がありませぬと、牛の歩みのトボ〳〵と、歸る夜道も頼なく、背の赤子のひもじうて、乳を求むる孤々の泣聲聞くときは、母とある身は寒風に、身を刺さるゝより尙ほ辛い、血を吐きにける不如歸、泣げど詮なきやる瀬なき、身を運ばせて來かゝる處は何處ならば、

詞「八王寺からズッと流れて來てゐる小枝川といふ。可なり大きな川があります。こゝまで來た時に下駄の花緒がブッツリと切れた、靜江も力がなく、ア、妻は因果なものだと慨いてフト立止り、川の面を打眺めて、何たか少時しは考へて居られたが、何と思はれたか下駄を其處へ脱ぎ棄てまして、脊の兒供に打向ひ

靜江「アゝコレ幸一郎ヤ、お前は乳が欲しうて泣いて居やるか、可哀想にの！……世にお前ほど因果なものは

ない、これも妾が惡いのであるから、何うか許してお呉れ、お祖父さまはアヽして金持ではあるけれど、冷たい心で一文もミルク代として立替は下さらぬし、もう此上は仕方がない、生れてゐるにも生きられぬ身体、お父さまやお祖母さまには相濟まぬが、死んでお詫びの外は道ない、サ、覺悟は好いか」

と、今し分別の大人に物言ふやうに、云ひ終つて、南無阿彌陀佛の六名諸共、橋の上から川中へ、母子両人はアワヤ淘然……ッと飛込まんとする。

ふし「夜道なれば、こヽは餘りの人聲なし、行人稀にして人家遠し、折々泣くは狐の聲、いと哀れにぞ聞えける、時しもあれや彼方より、男の聲して來かヽる容子、

詞「アヽ今日はメッきり寒い、早く歸つて嬶アと一緒にグッ〳〵でも一杯焚いて引かけやうかナ、此頃は戰爭でどこへ行つても軍の話しで持切りだか、一体ロ助の野郎は癪な奴ぢやなア、大分もう遲いぞ、早く歸つてやらねいと嬶アが心配しやアがる」

と云うて歩いて來ると、橋の畔で女が立つてゐる容子、

こりやア怪しいぞと、少暫し眺めてゐると、何だかその女が獨り言を云ふて、終ひにドブーンと川へ身を投げやうとするから、

○「オイ待ちねへ〳〵、早まつちや可けねいせ、生命は一ツより掛替えがねいせ」

と云ひつゝ、靜江の背後より帶をグッと掴んで

○「一体何うしたッてンだい」

靜江「アレ誰方かは存じませぬが、お放し下さいませ、妾は死なねばならぬ理由があるのでムいます、」

○「何の譯があつたッて死ぬとは餘り早まつたこと、マア俺の所へ來て、緩くり事情でも聞かしてくンねい、すりやア又た何とか方法も着くだらうから」

靜江「有りがたうムいますが、そればかりは申上げられませぬ事がありまして……」

○「でもあらうが、兎に角私の家へ來なせい」

と云ふので、

靜江「左樣なれば」と、

ふし「靜江さん、命助けられて行く先きは、兼ねて山瀬幸

太郎にさして、軍刀買へと金子五十両、送りましたる八王寺町、池口金五郎親分の、乾分で鯱の藤太と申す、若衆なり、あなたは誰れ訪ねられ、包み切れずに妾は、實は山瀬の妻にして、静江と申すものなるが、今夜貧苦の辛さに、父の家へと無心に参り、剣もホロ〳〵に追出されこの先き子三人が、糊することもなりかねて、死んで了ふ心積りでムいます、聞いて藤太、それはお氣の毒な至りなり、此上は藤太が引受けた、親分とも相談いたし、不都合なる父御山岡どの、行つて一と談判、若しも藤太

の顔を立てゝ呉れぬその時は、目に物見せて呉れんずと藤太控えよ、金五が行くと、茲に池口金五郎は、日頃の愛する日本刀をば呑みまして、代議士山岡惣助宅へと乗り込めば、同家の應接室で、惣御はピストルを用意いたし、双方談判重ねた末が、遂に破裂となりまして、茲に血の雨降らすか何うか、土木請負で顔の利いたる池口金五郎、義侠心に富みますれば、乗込みまして、いよ〳〵決闘いたすと云ふ、事の始末は如何相成るか、話したくは候へども、餘り長いで、一寸一と息、先づ御免を被り

まする。

（五）

八王寺町山岡代議士邸へさしてやつて來ました池口金五郎

金五「御面下さいませ〳〵」

と玄關口へ立つと、奥から出て來たのが書生の田中で

田中「アヽ何か御用ですか」

金五「勿論用がなければ來ませんがな、私は八王寺町内に

住む土木請負の池口の金五郎と云ふ者ですが、御主人山岡惣助さんが御在宅ならば御面會が致したい」

と云はれて書生の田中、豫て聞てゐる土木業の池内の金五郎、乾分の三百名もあると云ふ人であるから、何しに來たか知らぬが、又た迂るさいことを云ふて來たのではないかと驚いて居りまする、が追返す譯にも參りませぬから

田中「アヽさうですか、一寸お待ち下さい」

と云うて奥に這入り、此由主人山岡惣助に告げる、する

と惣助は矢張り心に驚いてゐる、俠客の金五郎が來たとは、さて何しに來たのであらう、が會はぬと云ふ譯にも行かぬが、と云ふので

惣助「アヽ田中、會ふから夫れでは應接に待たせて置け」

田中「ハイ、畏りました」

とそのまゝ玄關より金五郎を應接に案内する、約五分程待つて居ると主人の惣助が應接にやつて參つて

主人「アヽ金五郎と申されますか、私は主人山岡ですが……」

金五「コレは初めてお目にかゝります、私が土木請負の池

口金五郎と申すもの、かねゝ御高名は聞いてゐましたが、未だ一會もお會ひ申しませぬでした、何うぞ以後お見知り置を願ひたう存じます」

惣助「してお來での御用と云ふは……」

金五「イヤ外でも厶いませぬが、貴方は國會議員でございましたナ」

惣助「仰せの通り、如何にも私は埼玉縣選出代議士ですが」

金五「左樣ですか、代議士たるものが、國家を憂ふるのは當り前でせうか何うでせうか」

惣助「これは妙なお尋ねですな、敢て代議士に限らず、苟くも日本國民たるものは國の爲に憂ふると云ふのは情の然らしむ處で……」

金五「では更にあなたにお伺ひ申しますが、あなた殊に代議士に身を措いて、果して國の事を能く憂いて居られますか、何うですか」

惣助「金五郎さん、餘りそれは失敬でせう、山岡は日本政体に參與して居る者でござるぞ、何として忠君愛國、仁義正道を忘却しやうや」

金五「ところが山岡さん、あなたは仰しやることゝ、爲さることゝ相反して居りますな」

惣助「ナンと……」

金五「イヤ怒りなさることはない」

ふし「夫れは以前はあなたの御令嬢、今は山瀬の幸太郎に嫁いで居らるゝ靜江さん、その夫は陸軍豫備上等兵、今や露助を打たんため、干戈見ゆる滿洲に、屍を洒す決死隊、敵彈雨下のその中を、如何に國民の義務とは云へ、年老つたる母を置き、愛しの妻と乳呑子を、置いて軍に

出てゐらるゝ、それが爲に靜江さんは、今や翼折られし鳥のごと、糊口の途に困じ果て、子供のミルク買ひかねる、そこへ母御は重病で、一家悲慘の有樣なり、他人でさへも見かねるに、父ともあるに山岡さん、仁義の道を知るならば、夫幸太郎君の歸宅凱旋なさるゝか、夫れとも戰死が夫れまでは、どうか靜江さんの一家をば、何くれとなく面倒して上て貰ひたい、夫れだけを賴みに參りました、

詞と、聞いた父惣助は赫となり

惣助「金五郎さん、アヽその御用件ですか、夫れならば云はるゝだけ野暮です、靜江は私の家を出て、今では出入さへまともに出來ぬ身の上、あんな親不孝は何うあらうと私に、何等の痛痒とてありませぬ、そんな世話をすると、益々私の名譽を傷くると云ふもの故、ハヽヽヽ、折角ですが金五郎君のお言葉ですが、そいつは打放つて置いて貰ひませう」

金五「では金五郎がこれだけ賴んでもお聞きにはなりませぬか」

山岡「ハヽヽヽヽ、金五郎君どれだけ頼まれても聞かれませぬテ」

金五「金五郎も男です、若し三人の者の身の上を頼んで聞かれねば、私にも相當の考がありますし」

山岡「ナニ、相當の考、脅迫されては尙ほ何うも出來ないが何うする積りですか」

金五「エヽイ、此日露役に出征して居る家族三人を、十五萬圓の山岡が、賴んでも世話せぬとあれば、これ八王寺町の名折れだ、そんな人非人はこの金五郎が今一命を奪る考ぢや、山岡ッ、サア覺悟せいッ」

と持つたる仕込杖の鞘を拂つた、ヤッと身構へをする、山岡もさるもの、兼ねて用意の六連發、英國製の護身用の銃です、そいつを金五郎に向ける、今や斬らうとする金五郎、放さうする山岡惣助

惣助「サア金五郎、斬るなら斬れッ」

金五「ナニッ、生意氣云ふな」

と互ひに、危險の狀態に在る、此容子を聞付けて驚いたは例の書生の田中、腰を抜さんばかりに吃驚して、早速

交番へ駈付けた

田中「ヤッ、査公、大變だ、今暴漢山岡邸へ浸入したり、御臨檢を願ひます」

巡査「ナニ、山岡邸へ？、ヨシ直ぐ行くッ」

と云ふので警官は早速駈付ける、來て見ると、盛んに立廻りをやつて居る

巡査「両人とも静まりなさい、何をするかッ」

さすがは警官の聲に制せられて、聊か氣を挫かれた両人間の拔けたやうな調子で居る、さて金五郎から斯う〳〵

と譯を聞く、聞けば警官は山瀬幸太郎とは豫てより知人の間柄とて、成程それは法律上の干渉は出來ぬが、情條に於て相憐むべきことである、さるを當資産家山岡家に於て、夫れを救ふことを拒むとは道ならぬ申條であると云ふので、井上警官も一應惣助に注告をいたす

惣助「ヤア井上君、君は警官として當家に臨檢は忝けないが、其のお話しはもう聞くだけ駄目ぢや」

と云ふので井上君も憤慨をして去らるゝ、金五郎も早々引揚げました、さてお話し一轉して、山瀬幸太郎がいよ

〳〵武勳戰功を樹てるの一條は、次回にて講演仕る。

（六）

ふし頃しも三十七の年、三月三日午前一時三十分、威風堂々新橋を發し、全軍何の羔なく、宇品にこそは着にけれ、さても四月は二十有二日、三日の両日に、御用船に臺南丸、臺北丸を初めとし、日本丸や安藝丸や、香港、山城和泉丸、音に名高き常陸丸、其他船は八千噸、軸艫含んで解纜し、細谷海軍少將の率ゐし砲艦とて、赤城、

大島、秋津洲、其他の驅逐水雷艇、御用船を警備して、玄海灘を打越えて、遠き海路を辿り行く、我忠勇の丈夫が、心の裡こそ悲壯なれ、行くては何處滿洲や、ウラル貝湖打越えん、その雄々しさを夢みつゝ、精鋭幾萬と知られけり、

詞　さて山瀨幸太郎君は、今や出征の途、海上に在りて故國の老母と、また妻子の上を思ひつゝ、一本の鉛筆を取出してはハラ〳〵〳〵ッと白紙の上に落涙をして居らるゝ、が諸君、これは決して卑怯の涙ではありませ

ぬ、幸太郎君が何だか、白紙に文字を書いては海中に投ずる、又書いては同じやうに投じて居る、他の戰友は皆な、或は角力を取つたり、又は詩吟をやつたりして居るがあまり幸太郎が落涙しては白紙に文字を書きかけ、又夫れ海中に投り込んでは泣いてゐるので、他の人々が怪しみ出した

甲「オイ見給へ君、山瀬が何だか妙なことをして泣いてゐるぜ、アレ見ろ」

乙「オヤ彼奴は何してるンだらう」

丙「本當だ……オイ山瀬……」

幸太「何ですか」

丙「何ですかぢやアねいぜ、斯うなつた上は何を心配しても仕方があるまい、夫よりか愉快に暮して、敵地に入つては再び生きて歸れぬ決心でやらねばならぬゾ」

甲「山瀬。貴樣何を泣いてるンだ」

乙「山瀬オイ、君は何を書いて海中に放つてゐンだい、癈せ〳〵、詰らん考は……もう斯うなつて、お互ひに豫備役で召集された以上は、死ぬる積りで敵地に突

貫するまでさ」

幸太「ハイ」

と云はれ少時らくは止めた、がまた少しすると書出す、泣く、海中へ放る、そこで同僚も持餘して、兎に角上官に申上げぬと、返つて意氣に關すると云ふので、佐藤少隊長に俱申する

甲「小隊長殿」

佐藤「何だ」

甲「山瀨には困りました」

佐藤「ナニ、山瀨が何うした」

甲「ハイ、我第二分隊に、山瀨幸太郎があると、どうも他の者の意氣が亡くなつて可けません、彼奴、何のことか知りませんが、宇品出帆以來、隅の方にばかり居まして、涙をポロ〳〵ッと落しては、何か書いて夫れを海中に投げ込でまた書く、泣く、投ずる、何ほ諫めてやつても、同じ事ばかりしては泣いて居ります困つたものです」

佐藤「ヨシ、オイ山瀨、貴樣は何うしたンだ」

幸太「ハイ、實は私は、書いて惡ければ、最う書きません
が、少しく氣掛りのすることがありまして……」
佐藤「山瀨、卑怯なことを云ふなッ」
幸太「ハイ、小隊長殿のお言葉ですが、不肖も豫備上等兵
國家の干城たる軍人の端です、斯く出征の上は更に、
死を惜しむ如き卑怯は申しませぬ、只だ名譽の戰死を
遂げるばかりでございます」
佐藤「さらば何を心配するか」
幸太「ハッ、實は私は、七歳にして父を放れ、學校へも行

けずに、八王寺の町の桶萬へ奉公に住込せられ、十六
の年に小僧の年期を明けて、夫からは自分で輪替屋を
いたしまして、二十一才で徵兵に合格いたし、三年の
現役中、私は學問に心を寄せる暇がなかつたです、其
爲めに、生れついての不學、更に字が分らず、此度名
譽の戰死を遂げましても、遺骨に判然たる遺書がない
ため、誰れのやら分らぬでは殘念と思ひ、其時の要意
に、今自分の姓名を習つて居りましたのであります」
と聞いて佐藤少尉は落涙いたし

佐藤「山瀬、貴様の心事は分つた、同情する、貴様が先きに若し戰死したら我輩が遽骨を國へ送つてやる、安心せい」

と今まで怒つて居た少尉どの、遽かに目が喜びに光つた

ふし「さても我軍は、五月節句の日、大連へと御上陸、軍戰正に初まらんとす、寒風肌を裂く滿洲に、屍を晒す武夫が、矢猛心の一と筋に、君に忠義の念慮ぞや、遼東半島にさして上陸となる、

調「山瀬幸太郎君が先登第一に上られると云ふ譯、日章

旗は高く滿洲の野に飜る、これを眺めて船中の軍人等はソレ早やく行け〳〵、と一同上陸を急ぐ、此時臺南丸御座乘の伏見宮貞愛親王殿下、第一師團長に於かせられては、參謀長星野金吾大佐をお召しに相成り

宮「アノ日章旗を飜す者は誰れぢや」

とのお尋ね、星野大佐は畏つて豫備第一聯隊第一中隊の者、山瀬幸太郎と申す者なることをお答へする、宮樣は大層御滿足の御容子、宮樣に知らるゝは實に名譽なことでございます、

ふし「さて皆な〳〵無事上陸、中央隊なる第一師團は、要害堅固の聲へある、金州南山の攻撃と云ふ、勇壯活潑の大激戰、悲風慘憺の風、同胞の屍死は寒風に洒らさるゝ血は河をなし、戰陣の有様亦た悲壯なり、茲に山瀨上等兵が、名譽の軍功樹つる一とふしが、如何になるやら、一寸一と息きしてから申上げまする……○

《七》

詞、この南山の攻撃をしやうとすれば必ず先づ茲に、金

州城を占領しなければならぬ、北面が四師團、即ち大阪の師團、東門は第一師團、即ち東京の師團が攻撃することになりました、敵は前面に鐵條網を張りまして、砲口を我に向けて今や來る奴を待伏せてゐる、

ふし「遠くよりは大砲にて、近くよりは小銃にて、雨か霰の彈丸なり、一分の隙とてあらばこそ、ポン、ポポン、ポーン、我兵士は死するもの、傷くもの數知れず、見る〳〵間に屍の山、血の河となり、その間厭はず日本兵、戰鬪繼續いたし居る、金州城攻撃は、いと勇壯活潑なり

詞「これを陥落せしむるは餘程の困難、一寸やツとでは行かぬ、そこで決死隊を募ること丶相成つた、陸軍工兵上等兵中井數馬君が、先づ線火藥に發火させて、モノの美事に東門爆發破壞させる、萬歲の聲は天地に轟く、いよ〳〵大激戰、南山占領と云ふ大勝利の裏面に包まれましたる悲絶壯絶の物語り、となります。

ふし「さしも嚴重の鐵條網、東門は綿花藥のために破壞され、中にも第一聯隊は、潮の湧くがごとくにて、東の門より突進す、敵は退却いたし、第四師團は北門を、同じ

く綿火藥にて粉碎し、背面よりツルベ掛に、銃砲打ちしことなれば、敵は非常の損害にて、退却いたす、血河屍山の有樣なり、金州城は茲に、全く日本軍によりて占領され、いよ〳〵南山攻擊となる、決死隊は募られたり、

詞「さて山瀨幸太郎の屬して居る一中隊、整列をしてゐると林大尉が夫れへ出まして

林「司令部よりの命によれば、いよ〳〵今宵一時を期して、前面鐵條網を切斷破壞して、工兵二個中隊を決死隊としてやる、又た突貫の決死隊の命が我第一大隊に

下つた、夫れに就ては宮殿下より『成功を期せよ』と
の有難い仰せがあり、葡萄酒が出た、オイ山瀬伍長、
と言はれて幸太郎はもう此時は伍長となつてゐましたが
呼ばれて山瀬

山瀬「ハイ」

林「清水を一ぱい大バケツに汲んで來い」

山瀬「ハッ」

と答へて拵へて來る、その水へ貰つた葡萄酒を皆な入れ
て了つた

見るなり幸太郎驚いて『あなたは大尉殿ではありませぬ
か』見れば横腹より腦へかけての砲彈貫通、ア、臟腑は
露出して、早や虫の息でござるか、耳に口を當てゝ幸太
郎

幸太「中隊長殿、林大尉殿、山瀬であります、氣を確かに
お持ち下さい、モシ林大尉殿……」

と言はれて微かに細目を明けましたる林大尉

林「オ、山瀬か、露助の爲めに殺られた、おれは迚も最
う生命の望がない、部下は如何いたしだ、聯隊旗は無

たが、今や火を點けたものと見え、その上にありました大木が、一時に爆然動き出した、サア堪らない、轟き渡る天地の大音聲、忽ち四個中隊は全滅に近い、山瀬幸太郎君は、幸と云ふか何と申さうか、背嚢を落しただけで身体差少の疵もない、されど一時は其場に打仆れ、フト氣が注いて四邊を眺むれば、倒れし戰友重なりて、今まで共に話し丶者、早や名譽の戰死を遂げてゐる、

詞中にも幸太郎の前の方に打仆れてゐる、軍人を見れば、昨日までは親とも兄とも頼んだ我が林中隊長どの、

見るより敵は一分間六百發ほどの彈丸を發射いたします機關砲を發しては盛んに我軍を惱ます、是がために我軍に於ては死傷者ば山なす有様、苦辛を侵して七部まで破壞する、鐵條網は切斷される、殘るはもう後の三歩、待構へたる我豫備第一聯隊、進めッと云ふ號令もろ共、我れ後れじと進擊突貫いたす、屍を越えて進んで行く、その有様は實に酸鼻の極、語るも涙であります、

ふし「斯くの如にして、我が第一聯隊は、敵の鐵條網を打越える、敵壘を攻寄する、敵は地雷火を伏せてありまし

林「有りがたく頂戴いたすのだ」

甲「オイ、有り難いナ」

乙「オイ、此葡萄酒は水臭いナ」

丙「馬鹿、あれだけの水に交ぜたらば、當り前だよ」

と云ふが、マア何れも宮様の厚きお心に感泣した譯ですさて命令を受けたる各隊に於ては、いよ〳〵時間切迫、密かに前進と云ふことになりました、が敵も却々油斷はしない、探海燈や曳火彈を放つて盛んに我軍の行動を見守つて居る、工兵はだん〳〵鐵條網に接近する、それと

事か……」

と云ふ聲もかすれ〳〵

幸太「大尉どの、誠に殘念です、工兵二個中隊と我隊一大隊は全滅です」

林「ナニ、全滅！、聯隊旗は如何した」

幸太「ハッ、暗の爲め、聯隊旗の行衛は不明でございます」

林「フーム、してお前は負傷はないか、結構々々、僕は豫て決死のことゝて、認め置いたる一通の書翰、東京麴町三丁目十一番地の僕の宅まで確かに送り屆けてく

れぬか、山瀬、お前は無事で國家のために働け」

と今にも息を引取らんとして居りまする、

ふし「あはれなり林大尉、刻一刻と迫り來る、露の生命となりにけり、山瀬伍長は林を抱き、東に向ひ、掌を合はせ、三度び唱ふる万歳、茲に好望士官なる、林中隊長殿は、茲に名譽の戰死を遂げ、花々しくも失せてけり、

詞　山瀬幸太郎は、林中隊長と永別を惜みましたが、國の爲め名譽の戰死をいたしたのですから致し方がない、と諦め、大尉の書面とその寫眞をばお送りする、お宅へ

届けてくれと云ふ遺言によりまして、幸太郎は自分の服を脱ぎ、シッカと腹卷の中に收め、白七尺の木綿を取出し、大尉どの〻屍を敵の手に渡しては濟まぬと、その遺骸を自分がシッかと拘りつけ、茶毘一片の煙とせんものと、

ふし「こゝを立出でまして、暗さは闇し五月の、頃の迫る

か仲六月、山又山の南山や、難澁なれど何のその、君の爲めなら厭いやせぬ

詞　退却せんとして足を運んで居りまする幸太郎、何う

した譯か道を誤つて、追々敵地へ近くばかり、深く〳〵這入つて參りました、フット耳に這入つたのは、何か分らんが確かに露西亞人の言葉らしい、ハッ驚いた幸太郎息を殺して眺めてゐると、其處にはズッと輕便鐵道を敷設いたしまして、今や火藥庫より彈藥運搬の最中であります、眺めましたる山瀨幸太郎君、敵の生命を斷つは此火藥庫にあり、あれだけ破壞いたさば、正しく敵の戰鬪力を減殺するに違ひない、これを挫けば必ずや我軍の勝利ありありと、山瀨伍長は喜びながら、危險を浸して敵

地尙ほも深く進むところ、だん〳〵やつて參りまして、今や池口金五郎が惠んで呉れました、彼の關の孫六の一刀、秋水風寒きやつをば拔放ちたることにて、油斷をいたして居たる火藥庫の番兵をば、ヤッと一聲諸共、ロスケ三名を打仆しました、日本刀の切味知つたかとばかり尙ほも林大尉の屍骸を脊負ひまして、其處に居りました る露兵の銃を奪ひ取りまして、突然狙ひ定めまして、火藥庫目蒐けて打込んだり、何條堪りませうや、少し許り溫度を增せば、自然に大爆發をすると云ふ危險な火藥で

ございます、内地に於ましても、所屬軍隊の火藥庫が、時ならぬ音響を呈しまして、一大爆發の慘憺を呈することがあります、斯かる危險物に、幸太郎が一心こめて銃彈二發もお見舞したのだから堪りませぬ、ロスケの火藥庫に實に一大音響を發して、ズドーン……とばかりに勢ひ凄じく爆發する、露兵は散々になつた、死ぬやつも澤山あつたが、逃げる奴も少なくなかつた、山瀨君も爆發したる大きな破片の爲めに、何處となくしたゝか打たれて其處から、谷間へさして眞逆さま、コロがり落ちま

して、一時はそこで氣絶をいたして居られました、

ふし「あはれ勇敢なる山瀨君、伍長幸太郎よ、御身は國家の干城なり、お身のごとき忠勇な、振舞するで我軍は、いつも連戰連勝の、大利博することゝなる、ア、勇しき軍人よ、てもマア山瀨君は谷間にコロゲ落ち、死んだかと思はれたるが、天此の仁を棄てずして、やがて降り來る春雨に、五体濕ひ、雨が口中に自然に這入り、咽喉を潤して、やがても經つて、

詞「ウーン、」と氣が着いた、が四邊はます〳〵暗くなり

まさり、加へて雨はいよ〳〵降りしきる、ア、此處は何處ぞあらうと、フッと見廻しながら丸いものに目附いて手を延して取つて見ると、驚いた、敵か味方か首が一ツ尙ほ横の方をよく見ると首が一ツコロげて居る、最前から何か腰にものが當つて痛い、と思ふも道理、そこに血にまみれた胴体が半分あつた、林大尉のズボンのポケットから燐火を取出して、ランプの代用といたし、雨の勢ひを帽子に防ぎながら、四邊を見廻すと、悲慘又悲慘、ア、實に酸鼻の至りである、眺めれば眺めるほど慘たる

凄愴は四邊を壓してゐる、何かあると尙ほ眺めると、正しく一人の將校、日本將校の屍骸がある、オヤッと傍へ寄つて見ると、這は抑もこれこそは、我第一聯隊の旗手なる、岩田少尉殿であります、腰から下は敵の地雷火の爲めに切斷され、腰から上だけ殘つて居る、サモ生きてゐるかの如く、身は死すとも、我任務はこれ全うせんと言いたやうに、責任ある聯隊旗をば確つかと摑んだまゝ名譽の戰死を遊して居られる、山瀨君之を見て驚きまし た、立上つて一應聯隊旗に最敬禮をなし

幸太「岸田少尉殿、あなたは最早や名譽の戰死をなされしか、お心の中はお察し申します、聯隊旗はこの山瀨伍長が確かに我本隊へ持歸りますれば、御安心下され、それでは岸田少尉どの、これがお分れであります」

と聯隊旗を掴んで居た岸田少尉の堅い手をやう〳〵放させ、自分がそれを預つて、之を八ッに恭しく疊みまして懷中に藏ひ込み、相變らず林大尉殿の屍骸を連雀に負ひまして、竿頭につく御紋章は自分の頭に戴き、布巾を持ちまして、それを拘り、その上より帽子を被り、漸くに

して本隊さして歸らんと、涯を上つて參りまする、すると彼方より、遙かの沖合に聞ゆる突貫の聲、ワーッと上げたる一同の聲、最早や南山占領と相成つたるか、と思ふ間もなくはあらばこそ、敵彈か將た味方の反彈丸か、ブユーッと唸つて飛んで來た、アワヤ山瀨の腹から脊へかけてブスーリ、貫通をしました、何條堪りませうや、ウーン……と云ふなり其場に打仆れる、さしも要害堅固と誇つたる南山も、遂に忠勇義烈なる我兵の爲めに占領陷落されまして、萬歳アイーと云ふ聲は天地を動撼させ

る、が、併し此戰ひには實に數萬の犧牲を出して居ます
る、幾多の英魂が茫に仆れた■か分らぬぐらゐ、野戰病院
に送る數百千と云ふ味方の傷兵、衛生隊が擔荷に乘せて
運搬をして居る、病院に來る傷者を調べて見ると、腹部
に聯隊旗、頭上に御紋章を戴きましたる、山瀨幸太郎の
身体を見られた、一時行衛不明であつたる爲め、伏見宮
第一師團長殿下は非常に御心配遊ばされ、星野參謀長、
三原待從武官も大變御心配で居られましたが、この事が
分ると忽ち星野參謀長より三原待從武官に申入れる、三

原少佐が之を聞いて更らに宮殿下に奏上をする、聯隊旗
保護者は豫備第一聯隊第一中隊伍長山瀨幸太郎と分る、
宮「これは大溝上陸の際も先登となつた者ではないか」
三原「ハイ左樣でございます」
宮「負傷をいたしたか」
三原「ハッ、餘程の重傷でございます」
宮「何とか致して全治するやう、予かと云つて軍醫に傳
へるやう」
三原「ハッ、畏りました」

と三原少佐は早速野戰病院に行きまして、軍醫にも然う傳へる、すると鶴の一聲、軍醫は宮樣よりと云ふことを耳にいたして、まだ充分手當のしてなかつた幸太郎の手當に取かゝる、

軍醫「オイ山瀨ッ」

幸太「ハッ、も駄目です」

軍醫「氣を確固持てッ」

幸太「ハッ……」

と云ふて自分の脊中を眺めると、今まで負うて來た林中

隊長殿の死骸がない、

幸太「大尉殿の御亡骸がない、」

軍醫「イヤその林大尉の死骸は前に、ソレお前の横に寢かしてあるわい」

幸太「ア、林大尉殿、私も重傷を負ひました、もう一命は覺束ないのであります」

軍醫「山瀨、お前の腹部に藏めありし聯隊旗は、敵彈が貫通して、その爲めに十六の穴が明いてゐるぞ、血染の聯隊旗、お前が之を警護して上官に能く盡したのは、

我第二軍の功勞者とせねばならん、聯隊長初め一同大いに安堵いたしたぞ、」

と云ひ終ると三原侍從武官が其場へ立現はれて『伏見師團長宮殿下御名代三原少佐……』と聞いて山瀨は

山瀨「ハッ……」

と云つて立上らんとする、それを制めて三原少佐が

三原「イヤその儘でよい、さても汝が今回の戰功、實に莫大である、血染の聯隊旗を申上げたるに、宮殿下には大層御滿足の体であつた、十六の彈丸の穴は實に汝が

戰功を永遠に語るものである、今日以後將校の取扱ひを以て汝に充分の治療を加へさせるぞよ」

山瀨「ハイ……」

と云ふて幸太郎は忝けなさに涙を溢して喜んだ、その儘野戰病院へさして收容されて尙ほも治療を加へらるゝと云ふことになる、さても三原少佐は、宮殿下の御名代とあつて、日々御見舞に來られる、實に一兵卒としては此上もなき名譽でありまする、幸太郎の負傷は重大なものでありましたが、日を經るに隨ひまして、だん〳〵治療

の効空しからず現はれまして、日を益し經過は良好と相成る、又た此の野戰病院には、將校室に工兵第一大隊第二中隊の原田大尉殿が、これも敵彈に打られまして、右手の關節を碎かれまして、寢臺の上にて治療を受けて居られましたが、フト目を開いて片側を眺むると云ふと、一兵卒が寢てゐるから、看守に打向ひまして

原田「オイ此横に一兵卒が寢て居るが、將校室へ何う云ふ譯で寢てゐるのぢや」

と云ふ問ひにより、傍に着いてゐた看病夫が『原田殿、

御聞きでもムいませうが、彼れは豫備第一聯隊第一中隊の伍長にして、山瀨幸太郎と申す方にムいます、當血染の聯隊旗警護の功により、師團長宮殿下より特に將校の資格を賜ひ、三原少佐は宮殿下御名代として、毎日〳〵山瀨さんのお見舞に來られるやうな次第……」

ときかれて原田大尉殿も

原田「ア、然うか、山瀨君、君の傷はどうぢや、大分經過が宜いやうぢやのう、天晴れの戰功は我等の及ぶところでない、折角加養し給へ

山瀬「ハイ、有り難うムいます」

原田「併し君くらゐ大戰功を立てた人物ならば、定めし敎育ある立派な方であらう」

山瀬「イヤ別に敎育はムいません」

原田「ムヽ、何の商業であるか」

山瀬「私は桶の輪替屋でムいます」

原田「輪替屋？、ア、然うか、結構々々、して君には稲屋ならば、店でも張つて居るのか」

山瀬「オヱ、其日〳〵を八王寺町に於きまして、出て歩く

稼業でムいます」

原田「成程、して何か、後家内には、母御とか妻子とかある譯か」

山瀬「ハイ、一人の母に妻と赤ン坊とがムいます」

原田「然うか、同樣國家の爲めとは申せ、斯んな處に落込んでは、矢張り折りになれて故郷のことが身に染むのう」

山瀬「ハイ、貧乏な暮しの家ですから、私は矢張り氣にかゝります」

原田「フム、〜前は一度ぐらゐは此度びの戰功を知してやつたか、國許へ……」

山瀨「イエ、まだ一度も手紙はやりませぬ、子供の時より私は字を充分に學びませず、桶屋の小僧となりましたから、お恥かしいですが、字は滿足に書けませぬので召集になつてからは、未だ一度も手紙は書きませぬ」

原田「ソレは可かぬ、では僕が代筆をしてやらうか、オイ看護卒」

甲「ハイ」

原田「硯と筆とを以て來い」

甲「ハイ」

原田「僕の右の繃帶を解け」

甲「そんな事が能きまするものか」

原田「構はんから早く解けと云へば……」

甲「ハイ、仕方がないナ」

原田「コラ、何を云ふか」

甲「イヤ此方のことで……」

無理に取らせて、さて原田大尉殿、御深切な方ですから

山瀬から、その意味を聞き取り、不自由なる關節拉碎の右手を持ちまして、やう〳〵書き上られたその文意……」

拜啓　その後は絶えて御無音に打過ぎ、あなた初め母上様も悴幸一郎も壯健に候や、僕は三月三日東京出發以來無事、五月五日〇〇〇より上陸、六日晋蘭店停車場占領し、十六日十三里臺を占領、其際伍長に昇進拜令いたし、二十五日と六日南山大激戰、僕は其の際聯隊旗を警護いたし、身に大負傷を負ひたれども、八ッに折りたる聯隊旗は實に十六の彈丸穴を明けたると、

血に染みつれど、其功によりて、第一師團長伏見宮貞愛親王殿下より、毎日の如く、三原侍從武官の御見舞を忝けなうし、今や將校の資格にて、ダルニー野戰病院に治療中、全快の曉は再び合戰に加はるべく、今一と勵きの快心に御座候、母様にも右血染の聯隊旗のお談し聞かせられ御安心の程願ひ奉り候、尚ほ赤ン坊の教育其他家内萬事の儀はよろしく相頼み申上候、余は後便にて。

・明治三十七年五月三十一日

靜江殿

戰地病院にて　山瀨幸太郎

原田「どうぢや、是れで宜からう」

山瀨「ハイ、有り難うムいます」

原田「まだ出す處はないか、あれは序に出してやるぞよ」

山瀨「ハイ、甚だ恐れ入りまするが、夫れではもう一ツお願ひ申したうムいます、先きは八王寺町の土木請負業池口金五郎と申します」

原田「これはお前の懇意な先きか……」

山瀨「ハイ、出征の前途に關の孫六の業物を下さつた親分でございます」

原田「山瀨、お前は博奕打の親分に心易い奴があるのが」

山瀨「ハイ、餘り懇意と云ふ譯でもありませが、實は斯々〳〵の譯で……」

と申して聞かせると、原田大尉どのも頑含かれまし

原田「左樣か、夫れは何うも誠に立派な俠客である、男とは彼れのやうなのを云ふのぢや」

と賞されて、それも直ちに書いて下された、やがて原田

大尉どのか『看護卒、之を係り官の許へ持参して、検閲をして貰つて來い』と云はれまするので、看護卒が持つて行く、すると何うも官僚的のものは、馬鹿に階級を云ふもので、検閲官に山瀬の書面を見まして、之は一兵卒でありながら、斯く宮殿下の名を入れるとは可かぬ、と云ふのでそれを又、原田大尉の手許へ持つて歸る、

看護「大尉どの、これは可けないさうです」

原田「ナニ、可かぬと云ふか、何處が惡いのぢや」

看護「一兵卒の身で宮様の名を入れるが惡いとかで……」

原田「誰が云ふのぢや、係り官は……」

看護「清水中尉殿で……」

原田「ハヽヽ、アノ清水か、彼奴はまだ子供だから分らぬ夫れでは司令部へ持つて行け、司令部へ行つて検閲をさせるのぢや……」

看護「ハイ……」

一体原田と云ふ人は、こんな氣性ですから出世が出來ませぬ、軍の司令部におきましては、原田大尉の言なりと聞きて、夫れが軍事上の秘密でなくば構はぬと云ふこと

になりまして軍事上の郵便ですから

ふし「切手は要らぬ、日を經てはヒラ〳〵、飛んで行きます池口の、金五郎さん許へ行きまする、愛としの妻の許へ行く、そこで開けりや涙と共に讀むぢやらう……○」

話變りて、此方は郷里の靜江さん、夫山瀬君が出征の後非常な苦境に陷りまして、母と子供のミルク代や藥手に窮して、茲に進退も谷まりまして、川に投身死をさへ企てましたが、其後妙に池口金五郎の手に厄介同樣の有樣で、今しも靜江さんはすゝぎ洗濯をして居ましたが

母「モシ靜江や」

靜江「アレ母さん、お呼びなされましたか」

母「アヽ、アノ忙から手紙が來たやうだぜ」

靜江「オヽ、幸太郎樣からお手紙が參りましたか」

母「一寸お前讀んで見てお呉れ」

と云はれて、靜江が直ちに開封する、だん〳〵讀んで行く、

母「一寸待つてお呉れ、ソノ○○○と云ふのは何のことちやいナ」

静江「これは軍事の秘密と申しまして、戰の號とか、日月とかを云ふのは大ていの○○で、夫れ以上を云ふと、日本の爲になりませぬ、皆な秘密が分つて了ふと可けませんからと、云ふ譯でございます」

母「アヽ、然うかい、ぢやが一寸まだ聞かぬと妾には分らぬ、その文句の中の伍長とか云ふのは何のことぢや」

静江「ハイお母様、これは幸太郎様が此れまでより、兵隊で出世をなされた名でございます」

母「アア、怜が出征をしたのか、してその負傷と云ふの

は……」

静江「ハイ、これはアノ夫が戰のためにお怪俄を遊ばしたのでムいます、併し初めは大層難かしかつたのが、此頃では餘程よくなつたと云ふのでムいます」

母「オヽ、幸太郎が怪俄をしたのか、それは困つたのう、マア夫れでも大層宜うなつて結構ぢや、伏見の宮とはお稲荷様かえ……」

静江「イエ〳〵あれは宮様で、お天子様のお從弟でございまするが、大層お情け深いお方で……」

と聞かれた母後は、ハラ〳〵ッと眼から熱涙が出て靜江に向ひ、

母「嫁女、それは勿体ないことぢや、貧乏人の子にさう毎日〳〵お見舞して戴いては勿体ない……」

と母親は、心配ながらも我子の名譽の話を、いろ〳〵聞いては嬉し涙に咽んでゐます、そこで神棚へその手紙を献げて、洗米を供へ、榊を供へまして、尙ほも悴の武運長久を祈つて居まする、之と同時刻に、例の池口の金五郎の宅へも、一通の手紙が舞込む、郵便……、

甲「なんだい」

乙「こんな奴が這入つてるぜ」

甲「印紙が貼つてないぜ」

乙「見せてみろ、困るなア」

甲「別に困らんでも好い、これはお前、軍事郵便と云ふて、印紙は貼らぬでも好いよ」

乙「ぢやア誰れから來たのぢや」

甲「ソリヤアお前、アノ山瀨幸太郎さんからと書いてあるぜ、マア親分に見せて來やう」

と持つて行くと池口の親分が受取つて」

池口「こりやダルニーの野戰病院内に於て山瀨幸太郎からぢやナ」

と更に開いて見ると、幸太郎が血染の聯隊旗の一件、名譽の戰功のことが書記してありましたので、金五郎はいと勇ましきことに思ひ、已れ憎ッくきは山岡惣助、彼れ富豪の身でありながら、娘の貧苦をも顧みず、慾一點張りのやつぢや、何は兎もあれ彼の井上巡査も惣助に口を容れたが、聞入れないので同巡査も大層憤慨をして居

た、サア萬事は彼の井上氏に會つてからのこと、八王寺警察署へドン〳〵と走つて來る、硝子障子を明けて這入つて、

池口「井上さん〳〵、今山瀨幸太郎君から手紙がありました大勳功の血染の聯隊旗の一件……」

井上「來たか、ヨシ、お前は兎も角人民控處に待て居れ」

と手紙だけを持つて署長の前に行つた井上巡査、

井上「さて福田警視殿、實は彼れ衆議院議員山岡惣助と云ふ人、以前コレ〳〵云ふて、現在娘一家の貧苦をも救

はず、池口の金五郎が助けて居りまするやうなことであります、それで今日の處では今私の帳に彼れの言ふて居つた通りを控へて置きました、就ては斯う云ふ書面が山瀬から參りましたから、何うか署長にお斗り申して、彼れ山岡如き無慈悲な奴の生肝を取る工風はありませぬでせうか」

署長「ヨシ行れ、と云ひたいが井上、池口は土地の俠客ぢや、それを表面警察が共に事をしたでは、これ全く世間の議論が迂るさいで、君はたゞ今日限り警官を辭職

してのう、そして確かり談判を開け、表面拙者が助力は出來ぬが、私も男ぢや、正義人道のため、誓つて裏手から君を援助して、彼れ山岡に衝つてやらう、」

井上警官は直ぐと辭表を出す、池口の金五郎は之を聞いて驚いたが、井上のクソ度胸に感服を致しました、

ふし「さても井上、池口兩人が、正義人道のその爲めに、一身を犧牲に致しまして、右の手紙を山岡宅に携帶いたし茲に不義を懲すと云ふ、談判いかに相成るやら、お物語りは先づ一席息みまして、次回に詳しく申上まする。

（終編）

ふし「井上君と池口親分、再び山岡邸の玄關に現ける、
又も書生の田中さん、御苦勞さまにもやつて來て、
詞「サアお上り」
と云ふので案内をする、應接に兩人通さるゝと、やがて
來たのが當家の主人、
山岡「ヤア、御兩君何うもお待たせ申しました、井上警官
金五郎の親分か、久し振だナ」

井上「ハア、僕は此頃感ずる處があつて、巡査を辭したの
です」
と云ふと、
山岡「イヤさうでせう、君のやうな有望な男を何時までも
巡査にさせて置くのは惜しいと思つて居た」
金五「山岡さん久し振りですねイ」
惣助「ヤア金五郎實に久しかつたナ、何うかナ此頃は……」
井上「時に山岡さん、今日僕が來ましたのは、僕がまだ巡
査中に、彼の陸軍豫備後の軍人山瀬幸太郎君に就て、

あなたは山瀬君の人格を侮り、幸大郎が名譽の戰功を遂げるやうなことはない、あんな臆病者が名譽の働きでも致したら、山岡惣助は三ッ指ッイて大道で諸君にお辭儀をする、又た十五万圓の財産は皆な上げると云はれたことが、今回は戰地より、斯う云ふお手紙が着ました」

と井上君が山岡惣助の前にその手紙を示す、すると披いて見まして、惣助が

惣助　成程……これで見ると幸太郎が一方ならぬ戰功を

立てゝ居るやうでムいますが、山瀬は目に一丁字の辨へもない男、私は之が眞實かどうか疑ひます、モシ本當ならば新聞も書きもせうし、又た陸軍の公報にも出る筈であります、私は遺憾ながらこれは事實と見る譯には參りません幸太郎が送つたのではなかうと思ひます、僕の前の言を楯に取りて、僞筆かと思はれる」

と云ふを聞いた金五郎が、イヤ怒つたの怒らないのではない、

井上「コラ山岡、失敬なことを云ふな、おれが僞筆したやうな口振り、サア貴様は先日、俺にピストルを以て迫つたから俺れもピストルを持つて來た、覺悟せい、」と云ふたることにて、既に懷中よりピストルを出さんとするから井上君が

井上「オイ池口、そんな亂暴をしては可かぬ、お前は直ぐ夫れをやるから話が出來ぬ、兎に角僕が應對はして居る、お前は默つて居れ」

池口「でも井上さん」

井上「宜いよ、分つてるから亂暴はするな、山岡さん、あなたのお說も御有理です、併しです、この書面は池口金五郎に宛てた山瀨君からの書翰に違ひありませぬ、が今のお話しに上官が證明書を云々と云ふことがありましたが、それはモシ其事が出來れば、あなたも男、屹度お云ひなされたことは反古にはならんでせうな」

上金「いかにも僕だつて男子だ、苟くも代議士の名譽ある職務を有つたる我輩だ、一旦云ふた言葉に取消しばしない、證明するに足るものさへあれば決して後で待つ

たは申さぬ、必ず十五萬圓に熨斗をつけて差上るぞ」

では話は分つたと云ふので、金五郎及び井上の両名は、

一と先づ引上げる、

井上「オイ金五郎」

金五「なンでムいますか」

井上「なンでもないが、何うも俺れは調子ぬけが致した、

そんなことであつたら、巡査を辭職するのではなかつたのぢやに……」

金五「でも井上さん、行がゝりなら仕様がねい、今更ら愚

痴ッポいことは廢にして、山岡の野郎をギャフンと云はせてやるサ、男なら時と場合に依れば自分の職はおろかな事、一命までも差出さねばならぬではないか」

井上「それはマア金五郎の説の通りぢやがナ……」

金五「俺だつて、こんな暇を潰して有り難くもねいが、これも意氣地のためなら已むを得ない」

井上「でも我輩は今日から、もう祿をはなれた天下の浪人何と暮さうかゝ心配ぢや」

金五「その點ならば御心配無用、俺の家へ來て當分お暮し

なされませ、決して御遠慮は要りませぬから……」

井上「どうも氣の毒ぢやのウ」

金五「何うしまして……」

と到頭巡査上りの賭奕打の家へ食客に住むことゝ相成りました、

井上「併しどうも賭奕打の宅へ居候に住んでは……」

金五「ハ、、、、それは仕やうがムいませぬ」

といよ〳〵井上君が決心して、金五郎のお世話となる、是れよりもさゞ細かに事情を認めまして、滿洲ダルニー

野戰病院の將校室へ宛て、山瀨幸太郎宛にて、長い〳〵手紙を送りました、

ふし「さても大勳位、陸軍中將第一師團長、伏見宮は貞愛親王殿下には、今回陸軍大將に御昇進あり、軍事參議官の顯職に就かれまして、露西亞もとう〳〵戈納め、戰止んで此度びは、東都御凱旋の勇ましさ、就いては昨日まで自分の部下で、忠勇なる大夫が、敵彈に打たれて負傷なし、あるは風土の病に浸ざれ、病者となりて野戰病院に入り居りたる、幾多の傷病兵をお見舞なされ、惜しき

お分れなさる事となり、侍従武官は三原少佐を従へさせられ、それへお出でになりまする、病院長の案内にて、今や病室へ來られると、

詞「両眼を奪られた一人の兵士が、左右を顧ながら

○「オイ看護卒は居ぬか、ア、水を呉れ、水が欲しいと云ふに……」

とその繃帶の顏を動かして、苦しさうに水を要求いたして居ります、そこへ宮殿下がお通りになりまして、

宮「院長、あれは痛く叫んで居るやうす、水をやつては

惡いのか」

院長「ハイ、恐入りまする、水は別に惡いと云ふでもムいませぬが、何分人數が數多ありますので、看護卒も軍醫も足らぬがちでムいます、それでツヒその手遲がちに……誠にかゝる現物をお眼にかけまして、恐縮でムいます」

宮「フム、尤もな話ぢや、では三原、清水を持つて來い

三原「ハッ」

と答へて三原少佐が、バケッに清水を汲んで來る、アル

ミニユームの皿のやうなものでムいます、

三原「サア、兵士水をやるぞ、飲めよ」

と云うてお出しなさる、すると失明軍人は

兵士「どうも忝けない、此内の人とは違ふやうですが、誰何です」

宮「まだ欲しければ遣るぞよ、飲むか」

兵士「ハイ、もう宜しうムいます、この病院にも貴方のやうな親切な方がありますれば、誠に我々負傷兵に取りて幸福でムいますが、モシ、貴方の喫んで居らるゝ煙草は大へん香氣がありますな、一寸半分でも宜いから飲ませて下されませぬか」

院長「コラ〳〵、何を云ふか」

宮「サア、宜いから捨置け、之を喫めよ」

と一本一圓ほどの葉巻をやりますと、兵士はスッと吸ひまして何うも宜い香りだと喜びます、それからは宮様が一々巡り巡つて來られましたが將校室でムいます、

宮「ア、三原」

三原「ハイ」

宮「アレに將校でない者が居るではないか」

三原「ハア、彼れは豫て申上げたる通り、山瀨幸太郎と申す者で……」

宮「ア、山瀨であつるか」

尤も山瀨君は此時特務曹長に昇進して居りました、宮殿下にはツカ〳〵とお傍へ寄られまして、山瀨の両手確つかと握り、

宮「山瀨、汝は其後の容態如何であるか」

山瀨「ハイ、誠に天恩を以ちまして、日に増し恢復いたし

居ります、」

宮「フム、それは何より結構ぢや、汝は金州南山の役にて、戰功衆に優れ、誠に武勳の譽れ高きもの、血染の聯隊旗は我等帝國軍人が、長く紀念とする話であるぞ余は今回大將となり、軍事參議官にて東京に立歸れば陛下に此由を物語りを致すぞよ、身を大切に致せ、又た汝に此品を遣す、後日の紀念に之を持て……」

とて下されたは、是れぞ即ち金時計であります、尤も鎖も附屬して居りましたが、山瀨は押頂いて、何と言葉も

あらばこそ、嬉し涙にくれて居りまする、宮殿下の此様な下を慈むお心に、誰れとて感泣せぬものはムいませぬでした、いよ〳〵宮殿下には於かせられては、東京へ御出立、名譽の凱旋遊ばれまする、

詞話變りて山瀬幸太郎の寢てゐる處へさして、一通の郵便が來ました、誰れからであらうかと、原田大尉に頼んで、讀んで貰ひますると、これぞ池口金五郎、井上元巡査の両名から、事細かに書いてありまする手紙、今頃の東京での事情が皆な知れました、別に彼れの十五萬圓

の財産を望むのでは夢さら〳〵ないが、上官の證明を貰つて置かぬと、彼の頑固な頭が押へられぬ、すると云ふいつまで經つても、山岡ごときものが八王寺に在るとすれば、不名譽此上ない、正義のため、誰れでも宜いから上官の證明をくれよとのことが、詳しく細かに認めてあります、その事を原田大尉が親切に云うて聞かせてゐると、其場へ一人の將校が參りまして、山瀬よ、汝の軍功は實に偉大なるもの、軍人の範典たるに足る、奥大將第二軍司令官閣下、伏見宮第一師團長閣下、小原豫備第一

聯隊長殿、これら面々の感狀である、有り難く頂戴いたせ、と云ふて來た、一時に三通の感狀を受取りました、原田大尉之を見て、感狀か、結構〳〵、それでは金鵄勳章ぢや、俺れが返事は今書いてやるぞと云ふので、今や硯に筆を浸し、一筆染めかけてゐる處へ、病院より、重傷者は内地へ送還すると云ふことになり、山瀨幸太郎も内地へ送らるその一人となりました、そこで返事も要らぬと云ふので、山瀨は東京の豫備病院へさして送らるゝことになる、原田にも厚くお禮を述べ、分れを告げまし

て、いよ〳〵東京へ出立、先づ書面で、今歸京すると云ふことだけを、池口と自分の宅へまで知らせてやる、もう早いもので、チャンと此頃では幸太郎が、東京の病院へ這入つて居ます、そこで母と靜江は久しく會はぬ夫幸太郎の顏が見たくて堪らぬ、早速出掛ける、池口も甘い土産を以て訪問見舞をすると云ふ、何れも會つて當分はあまり嬉しくて云べき言葉さへないぐらゐで、涙に暮れて居ました、眞情同志が會合した時には、中々言話などの出るものではありませぬ、これが人情でムいます、が

少時く經ちましてから幸太郎が

幸太「お母さん、靜江、長らく會はぬで淋しかつたでせう私も此たび名譽の負傷をしまして、此通り戻るやうになりました……」

母「幸太や、ひどく惡くはないか」

幸太「エ、幸ひに大事にも至りませぬでした」

靜江「旦那樣、あなたは今度えらい御勳功でムいました赴き、書面で承りまして一同勇しく存じます」

池口「オ、山瀨君、君の勳功は實に偉大であつたナ、我輩

の方でも大いに感服してゐる、過日書面でもつて御通知はして置きましたが、實に山岡は、君に對しては眞とは云へ、あまり亂暴な奴である、怪しからぬ……」

幸太「ヤ池口の金五郎さんでしたか、金州南山攻擊のために、斯く重傷を負ひました、もう身體は元の健康體には直らぬかと存じますが、これも君國のためですから更に惜しいとは思ひませぬ、」

金五「イヤ感心々々、君のやうな犧牲者が出たから、難攻不落の旅順も陷れば、又た南山も金州も日本軍のもの

になつた譯である、我等內地の者は誠に日々、感謝に堪えない、」

幸太「ヤア金五郎さん、さう云はれると恐入りまするが、實に今度は苦疲を覺えました、谷間で仆れて、既に氣絕までした處を、衛生隊に救はれ、遂にこんな東京もどりとなつた譯で、思へば戰地へ出征の當事の容子から、皆な夢のやうであります」

金五「イヤ御察し申します、ところで、山岡と僕の衝突によりまして、私も男の意氣地、引くに引かれず、ビス

トルで決鬪までしましたが、井上と云ふ巡査も仲へ這入りまして、こゝにお手紙を差上げましたやうな次第です、その證明書のことは何うですか」

幸太「イヤ深い話も承はりたいですが、實は宮樣よりは特に御優偶、この通り三通の感情に、金時計までも下賜されて居ります、數ならぬ私ごとき一兵卒には無上の光榮と云ふべきことでムいます、これと云ふも實に皆さんが、出征の際より、不肖幸太郎の身を御引立て下さつた、それに報いんと決死の覺悟で働いたに過ぎま

せぬ、山岡惣助が不道惡辣の一條、そのお話は承はりたうムいますが、こゝは病院のこと故、もう私も退院は近日中とのこと故、その日こそは、皆さまと緩るりお話をも致しませう、その時詳しくかゝる、その時までお待ち下さい」

金五「左様か、それでは然ういたしませう」

と云ふので、その日は立分れる、

ふし「井上も池口君も、諸共に歸り來る、母と妻とは安心して、一日も早く夫の退院を待つて居る、中にも靜江の

喜びは一と方ならず、又た格別でムいます、それもその筈、會うてやう〳〵一年を、經つか經たぬに日露の役、出征ありて戰地に至り、寒風つんざく野邊に立ち、夫の働く事思ひ、家には子供が飢に泣く、母が病氣の床に伏す、されどか弱き女手の、如何ともする由はなく、たゞ父上と賴寄れば元來頑固暴欲の、一徹者とて相手にならず、親分金五郎に賴りの綱、その細腕にすがりつき、泣く子母をかばひつゝ、暮し居りましたに、今夫の歸京と聞きましては、何で胸がおどらぬで成ませう、それさて

措き幸太郎は……

詞何日か退院となりまして、我家へ歸宅を差許さるゝ誠に喜びまして、靜江にも面會、母にも對面、イヤ双方のよろこびは又格別でムいます、仲睦じく暮して居ました、幸太郎は遂に重傷のため、もろく身体に少なからぬ缺陷は生じましたが、戰爭には出ないで可いと云ふことになる、癈兵の中へ這入りました、が有難い上のお思召し、幸太郎の功績調査の結果、行賞と云ふことになりまして、遂に功六級の金鵄勳章と云ふので、年金が二百圓

と云ふ名譽のある身となりました、歸郷の際には、村の衆が澤山に出迎へを致しました、人間と云ふものは、至つて現金主義なものでムいます、何うも貧乏な奴だと思ふと相手にしない、が少し調子が好くなつて來ると、知らぬ奴まで何とか云ふてやつて參ります、これが當世の人情であります、それで支那では唐人が歌ひました、手を返せは雨となり、手を覆ふと雲となる、人の情は輕薄なと歎かれたことですが、誠によく云ふてあると思ひます、話は他へ反れましたが、村の奴等は皆な、前の冷淡

なやり方を幸太郎君におわびを致しました、そこで幸太郎君も人が大きいから、そんな小さなことで人は責めない、一夜酒肴で大いに人々を歓待いたします、

ふし「日ならずして、茲に名譽の軍人、山瀬幸太郎君と、井上巡査池口金五郎親分が山岡邸に訪問し、いろ〳〵述べて山岡の、非人道を痛罵する、山岡もさるもの、兜を脱いで敬服し、山瀬君悪かつた、許してくれよ、私はこれから、君を我子と思ひなし、此財産も分けてやる、娘と末々永らく、夫婦で暮らして行つて呉れ、言はるゝ心

は誠なり、そこで池口も、井上も満足し、山岡君分つた君も男だよう云ふた、それでは山瀬君、君は當家に養子となれ、妹政枝も承知して、今や十五萬圓の若旦那、赤き心を持つならば、忠義孝心あるならば、いつか通す桑の弓、山瀬幸太郎が悲壯の物語り、南山血染の聯隊旗、語も聞も勇しや、召集令は先づ之に講演終り奉る……。

浪花節

召集令

終

大正三年一月一日印刷
大正三年一月五日發行

不許複製

著作兼發行者　大阪市南區松屋町三十九番地　榎本松之助
印刷者　大阪市西區阿波座上通二丁目　上野惣太郎
印刷所　大阪市南區松屋町末吉橋北へ入

發賣所　榎本書店
振替口座大阪三四八三
電話四五二六番